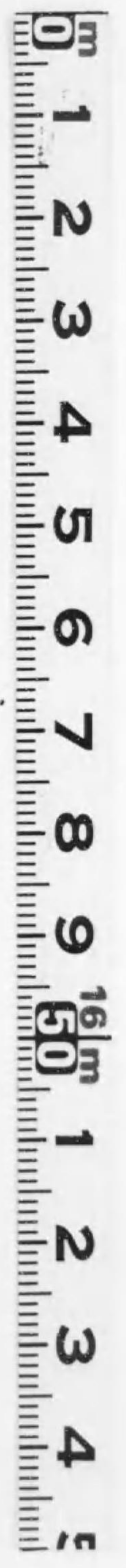


觀小語函

北京圖書館
藏書之佳

特



始

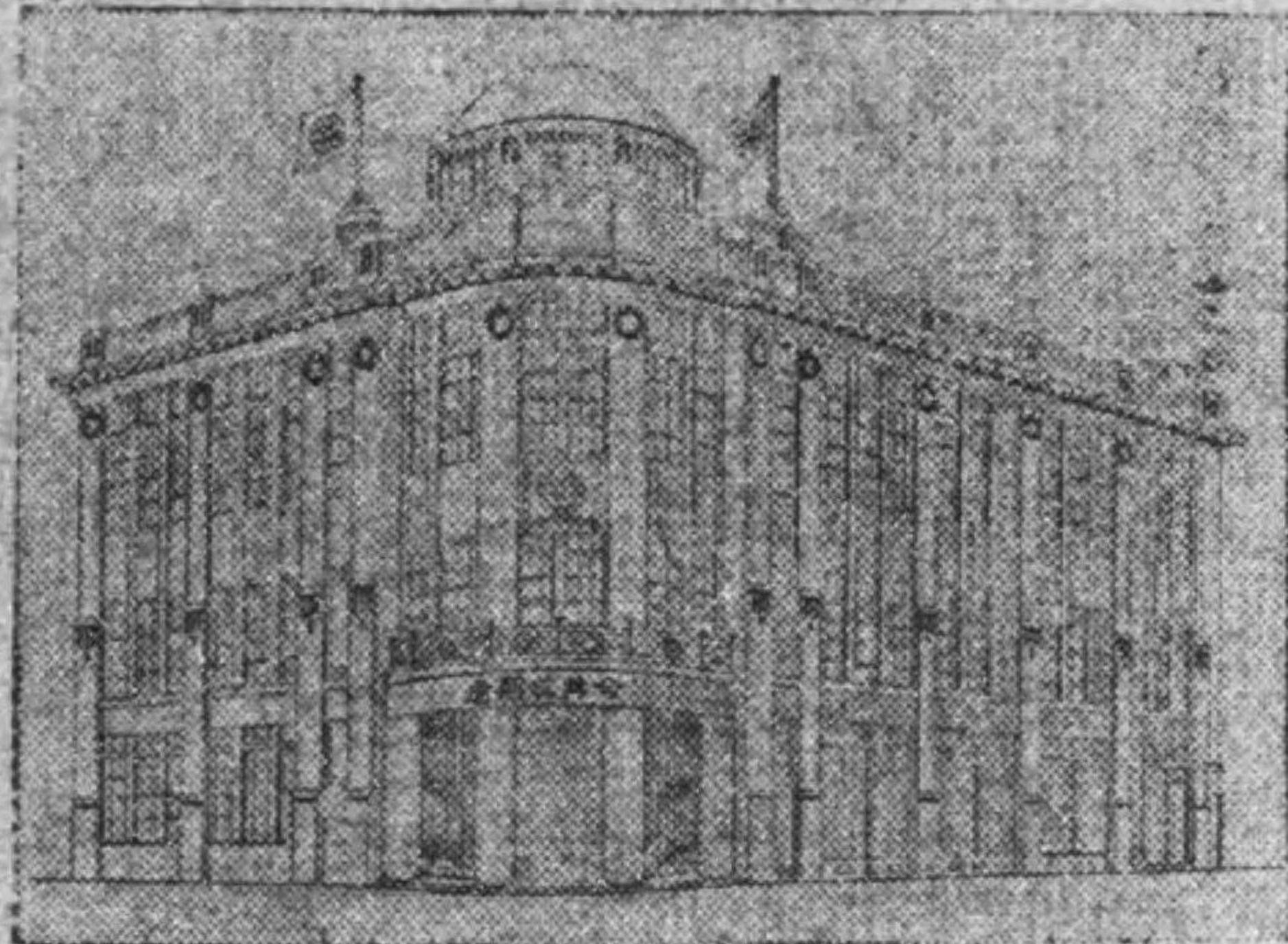


最 新 版

函 館 小 觀

本 家 慶 次 郎
杉 原 庄 之 助
共 著

牛



函館

井 今井呉服店

弊店は御客様の店として親切第一に家庭奉仕の實を擧げる事に努力して居ります何品に不拘御用命を願ひます

商品切手

札幌 小樽 旭川 室蘭 各地支店
共通なれば御贈答用品として最も重寶で御座います

擇んで擇んで擇んだ末に

擇ばれたのが

此マークの品です

各種ビスケット
各種掛物類 製造販賣

函館市千代ヶ路五十三番地

函館菓子製造株式会社

振替小樽八五七七番

擇んで擇んで擇んだ末に

擇ばれたのが



此マークの品です

各種ビスケット
各種掛物類 製造販賣

函館市千代ヶ岱五十三番地

函館菓子製造株式会社

振替小樽八五七七番

函館の食パン

それは精養軒のパン

精養軒

函館市相生町
電話二二九番



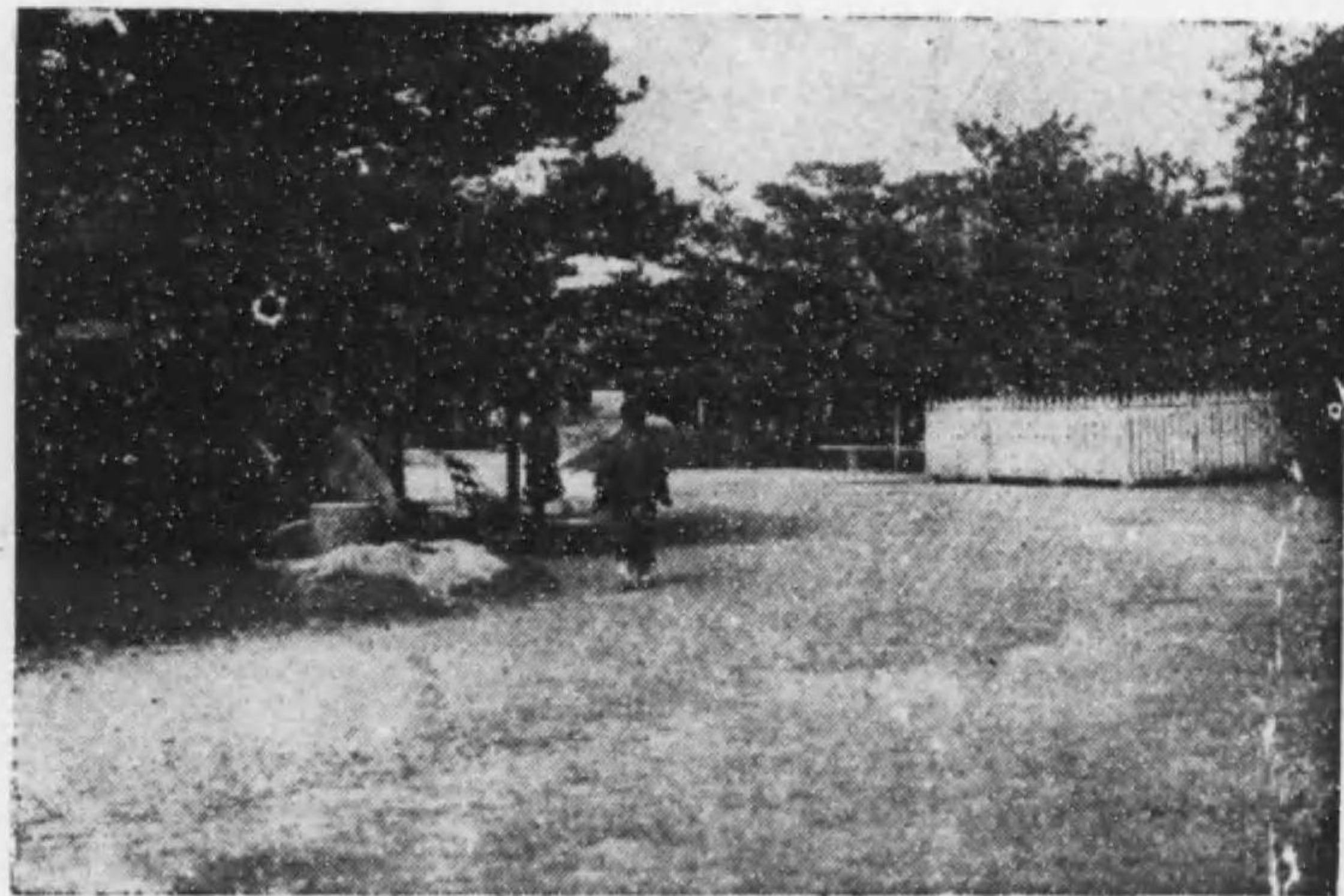
(上) 函館商業會議所 (下) 恵比須町銀座通り



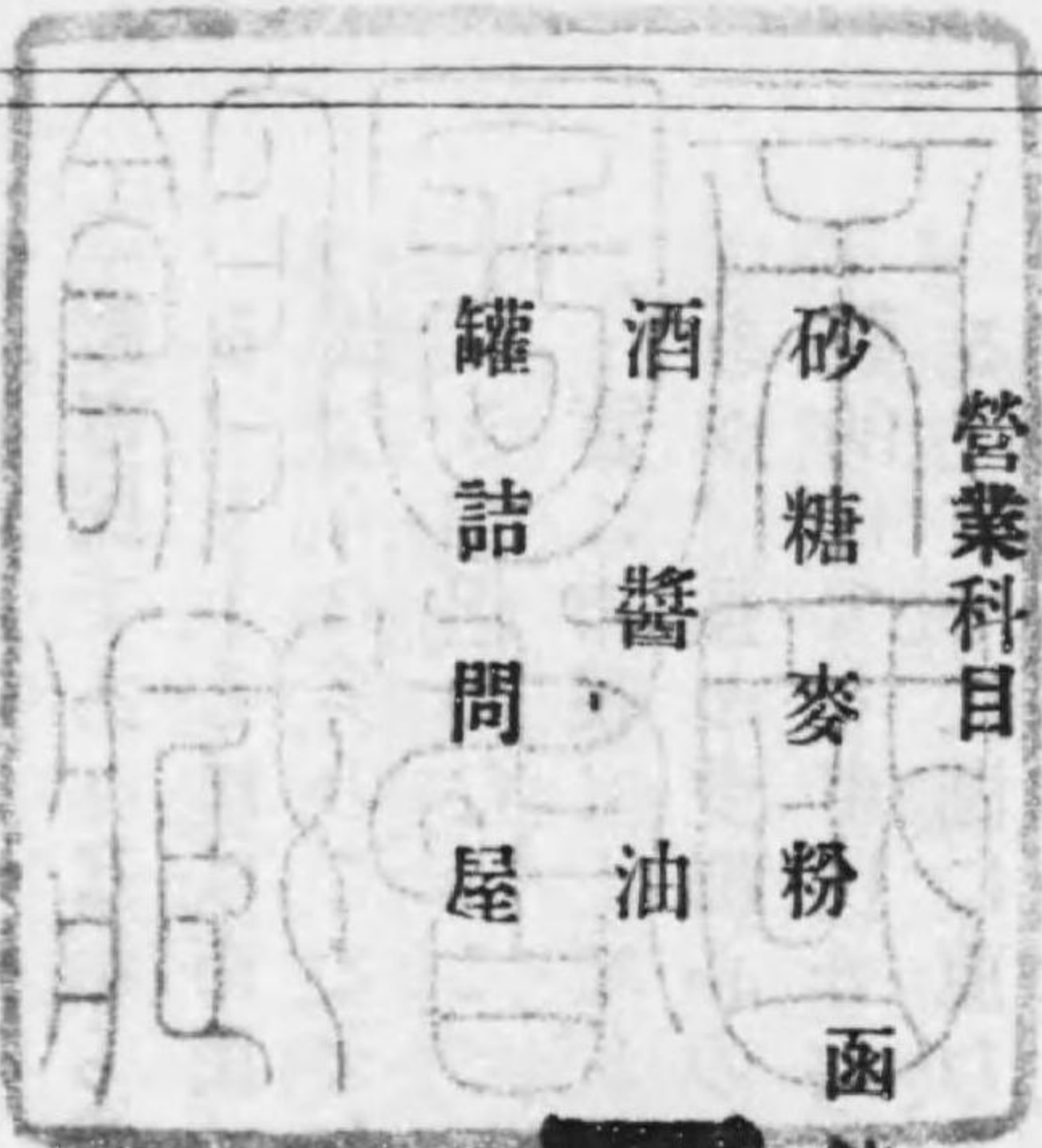
函館公會堂



函館公園



持 110
744



營業科目

砂糖 麥粉
酒 醬 油
罐詰 問屋

函館市末廣町八十一番地

正目貫商事株式會社

電話 樽園二八六四番四三八番
電略 (メ) 又ハ (メ) 又キ
受信登録 (ハコダテメ) 又

振替口座 小樽 一六六二番



自序

日本人でありながら完全に日本の紹介が出来ない人のあるやうに、函館市民でありながら眞の函館を語ることの不可能な場合の多いことがある、——それは市民として研究し置かねばならぬ、即ち知つて居なければならぬ等のことを知らないからに起因する失態なのである、否な便すべき伴侶のないことに災する恨事なのである。

實に市民として完全に函館を紹介し得るといふことは重大なる責任であり、且つ愛都心の流露なのである、恚うした痛切な欲求から切めて小觀的にでも市民と共に知り得たいといふ考で編輯したのが即ち本書である、敢て江湖に薦むる所以この點に存することを諒されたい。

大正十三年九月

青柳町寓居にて

本家虹嶺

序に代へて

ラフカディオ、ヘルンが亞米利加のシンシナイテの或る小さな新聞社に記者として働いて居た時代の事である、同市には非常に高い塔のある會堂があつて、屹然として空に聳えてゐた、そうして其の塔の頂上には未だ嘗つて誰も登つたことがないといふ程であつたが、或時その修繕の爲めに職工が一人上らなければならぬといふ程となつた、ヘルンは早速承諾を得て、其の職工と共に塔の頂上に登り、其處から見渡した市内や、市外の眺望を新聞に書きつらねて一般の人々を驚かした——といふことが彼の傳記の中に傳へられて居ります。

これは何を意味するものでせふか？少しでも離れて觀る其處に深い興味があるのではないでせふか、即ち自分を自分で觀ることのできない様に函館は函館市民に見えないことが多いのではないでせふか、觀察は旅の者の方が鋭いといふ理由は其處に在ることと信じます。

ヘルンの模倣はできない迄も、二十年振りて舞戻つた蝦夷つ兒の所見を鳥辭がましいながら函館小觀と題して之を我が函館市民に捧ぐるものであります。

甲子季秋九月

於鮫川溫泉

杉原虹民

函館船渠株式會社

代表電話番號三三三〇番

家庭の電熱化

輕便且優美且安全で最も衛生的な電熱器を御勧めいたします

御臺所第一の重寶器
電氣七輪

- 釜をかければ 御飯が焚け
- 鍋をかければ 煮焚が出来
- 茶瓶をかければ 御湯が沸き
- 鉄板を載せれば お魚も焼けます



飯炊兼用電氣七輪

其他電氣飯焚釜、アイロン、電氣茶瓶、色々御座いますから何卒御用命下さい

函館水電株式會社

▼電熱器……………▲

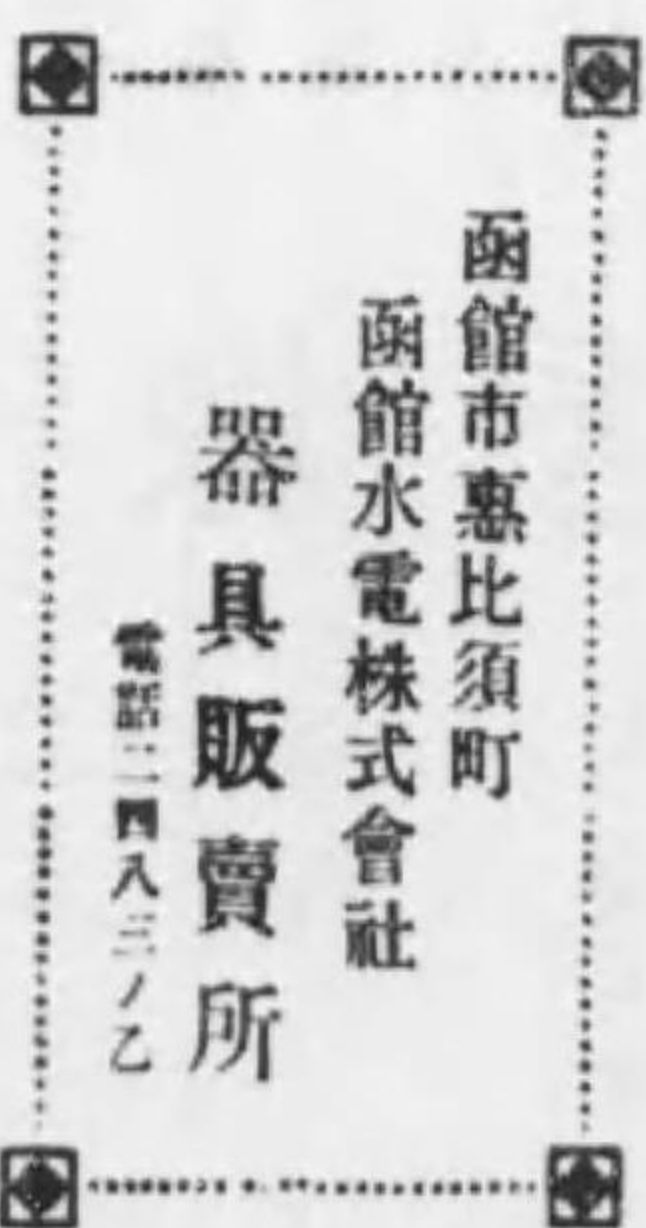
▼電燈照明器具……………▲

▼電球類……………▲

▼御立寄

◆を是非願います

▼御一覽



名物にうまい物あり

赤かぶ千板漬
鮭すし

函館に

お越しになつて

お忘れになつては

大變です

おいしいので

評判の帝製品の

御土産を

御氣に入りましたらどうか御買上願います

さぶ波かに	さぶ波するめ	さぶ波こんぶ	こんぶ八ッ橋	北海の華
-------	--------	--------	--------	------

営業種目

昆布菓子	昆布茶	花折昆布	焼雲井	いか粕漬	筋子粕漬	鮭身粕漬	帆立粕漬	鮑の粕漬	鱈粕漬	北寄粕漬	練燻製	鮭燻製	塩数の子	いか塩辛	うに塩辛
------	-----	------	-----	------	------	------	------	------	-----	------	-----	-----	------	------	------

塚越市商店

函館市末廣町

振替口座東京一七七一

電話八三九番

電略(マヤ)又一(ハ)

函館小観目次

函館の沿革	一
地位及人口町名	五
風土氣温	六
上下水道と傳染病	八
下水と衛生思想	九
公園	一一
建築物と市觀	一二
教育と學校	一四
娛樂機關施設	一六
警察事故と刑務所	一八
消防組織と豫算	一九
社會事業一般	二二
市有財産と徴稅成績	二三

大正十三年度市歳入出豫算	二五
金融と銀行	二八
企業界及工業	三五
交通と航路	三六
海運業	三九
商港と貿易	四二
倉庫業	四七
漁業と其影響	四九
輸出海産物仕向地方	五三
海産物仕建一覽	五四
農業と畜産	五五
著名公官衙	五六
神社佛閣	五九

新函館見物

港をみての感想	六四
富國の道程へ	六六
富豪の應揚さ	六七
花形役者の露國人	六八
底力ある総ての風物	七〇
劇として観た新函館	七一
エサバは函館の愛護者	七三
一足飛びの新流行	七五
猫背?の女へ	七六
啄木への拶挨	七七
看板廣告について	七八
二度と行くまい辰巳の里へ	八一
洋装と紅禪の保存	八三

家庭教育の挿話	八五
夜市と縁日の對照	八七
新意味の自慢一ツ	八八
市議員尊名と選舉	九〇
皮肉な火事親父	九二
龍紋米の由來	九四
冥福する五稜郭	九六
五稜郭の劇人形	九七
尊い一錢圖書館	一〇〇
驛員は玄關番であるのである	一〇一
權威ある電車教育	一〇二
忘れられない競馬	一〇三
運動場と野球熱	一〇五
郵貯から見た市民の富	一〇六
函館に育つ俳優が欲しい	一〇七

藝術家と町廻り	一〇九
映畫と人氣女優	一一一
離婚數字抹消の秘決	一一二
トラピスマス生活を訪ねて	一一五
湯川温泉から	一一七
地方趣味としての上戸黨	一一九
副業としての養豚業	一二二
水産物と加工の發達	一二五
鮫川より東京の娘に	一二七

函館著名營業案内

米、麥、雜穀、澱粉商	一三四
砂糖、和洋酒、食料品、味噌、醬油商	一四三
海產物、海草、肥料、鹽魚、鮮魚商	一五〇
飲料水	一五四
菓子、茶、薰香商	一五五
乾物、果實、蔬菜商	一五八
獸肉、バタ、鶏、卵、煉乳商	一五九
紙、文房具、書籍商	一六〇
洋雜貨、化粧品商	一六一
吳服、洋反物、洋服商	一六五
毛皮、皮革商	一六七
新古衣服及洋服商	一六八
漁具、葉加工品商	一六九

藥品、火藥、醫料品、染料、工業藥品商	一七一
時計、寶石、貴金屬商	一七三
履物、附屬品、傘商	一七四
靴、革具商	一七五
荒物、雜貨商	一七六
硝子陶磁器、漆器商	一七九
空物、古道具商	一八〇
建具、疊、洋家具商	一八一
燃料、諸油、礦業	一八二
造船、諸機械、塗料、船舶用品商	一八四
諸金物、度量衡商	一八六
和洋建築材料、セメント商	一八八
木材、製材、製函商	一八九
海運、回漕業	一九一

銀行	一九三
金融業	一九四
保険代理業	一九五
倉庫業	一九六
各種請負業	一九七
醫師、病院	二〇〇
西洋洗濯業	二〇二
公周旋業	二〇三
旅館	二〇四
理髮業	二〇五
洋食、喫茶	二〇七

函館市の沿革

信羅之記録に

「——全盛の時、毎年三回つゞ若州より商船來る、此處の間屋家は渚汀に掛造りして住す、依つて纜を椽の柱に結び繋ぐといふ」
斯く産れながらに、天恵を擅にする東經百四十度四十四分、北緯四十一度四十六分に位する函館市は。海拔百五十有餘尺の臥牛山を背景に、五十五萬四千六百坪よりなる巴狀港に抱擁され、人口十五萬を有する日本著名の都市である

然り茫漠際涯なき北海に、呱呱の聲を擧げそうして海に育つた函館は、將來海を離れて活んとすることの不可能なことはないふ迄もない、さあれ海は何をか語る？

お伽噺ではないが、昔々その昔函館は蝦夷語でウスケシ（入江）と稱し、僅に土人の棲息して居た漁村に過ぎなかつたのであつた、然し古書を繙く時、和人の移住に就て歴史は恁う語つて居る

「後鳥羽天皇の文治五年源頼朝、陸奥の藤原泰衡を征討せし時、泰衡の將士敗れて此の地に入る、是即ち和人渡住の濫觴なり」と

更に後花園天皇の寶徳年間、河野加賀守政通が此の地に箱形の壘を築き館を爲すに至つて始めて箱館の名稱が起つたのであると

茲に於て、是を觀るが、我が函館は實に鎌倉時代乃至南北朝時代に於て既に和人の居住開發するもの存つて文化の基礎は築かれて居たのであつた、爾來幾多の變遷を経て明治八年八月十五日蝦夷地の稱を北海道と改廢し十一國八十六郡と爲し同時に從來用ひられた「箱館」を「函館」と改稱することとなつた

世界航海業者のその携帶する航路圖の中には、良港として既に知られて居たらしく、殊に隣接して居た露西亞は好奇と野望を抱いて日本への接觸を窺つて居た

突如西曆一千七百九十二年（寛政四年）六月露國の船舶が我函館に來た、是外國船の函館港に始めて現はれた稀有の事件で、開港史上異彩を放つに足る

之が嚆矢なのである

由來長崎に次ぐ對外策源地となつて、殊に幕府外交史の大半を埋むべき對露政策が、函館の地を舞台として進展されたのであつた、かくて安政元年十二月、時の函館奉行竹内保徳が幕府に提出した進言書に

箱館は船中より一望すれば市塵村落見透に相成其上上陸遊歩すれば尙更虚實を了察すべきに付警備嚴重ならざるに於ては夷人共侮慢して不圖爭端を開くに至るやも知るべからず

云々としてある、亦寛政十一年十一月南部大膳太夫が

蝦夷地爲固先達箱館表へ人數差出勤番の儀相達置候處最早其儀に不及候蝦夷地の内サハラ、並クスリ邊へ勤番所取建候間右場所へ其方並津輕越中守より重役の者二三人宛並に足輕千人程御用地年限中爲相詰候様可致候（中畧）尤津輕越中守へも相達候間得其意是又被談候

と二藩共同警戒に着いて居た、かくて函館は商港としてまた軍港として幾多の施設が構せられ蝦夷地警備の本營地となつて長足の發展を招いたのである

地位と人口と町名

函館市は本道都市に在りては第一位にして全國都市順位より觀れば第九位である

大正十二年度末に於ける戸數三万四千五百五十六戸、人口拾五萬二千三百八十三名

町名

山脊泊町、鱧澗町、台町、小舟町、台場町、帆影町、仲町、新濱町、船見町、駒止町、天神町、旅籠町、鍛冶町、大黒町、辨天町、西濱町、幸町、富岡町、大町、仲濱町、元町、會所町、末廣町、東濱町、汐見町、曙町、壽町、相生町、惠比須町、蓬萊町、寶町、春日町、青柳町、住吉町、谷地頭町、若松町、榮町、西川町、地藏町、汐止町、船場町、豊川町、眞砂町、鶴岡町、旭町、東雲町、大森町、松風町、音羽町、東川町、海岸町、大繩町、高砂町、新川町、大字龜田村

風土氣温

函館の氣温は累年平均表に據れば全年攝氏八度八分で青森より僅に三分低く札幌より高いこと約二度である

月別	最高平均	最低平均	平均
一月	五、五度	(一) 一三、〇度	(一) 四、〇度
二月	五、六	(一) 一三、四	(一) 二、〇
三月	一六、七	(一) 一四、〇	(一) 二、二
四月	一九、四	(一) 五、七	五、四
五月	二一、一	〇、八	一〇、八
六月	二二、三	六、五	一三、九
七月	二六、八	一〇、二	一九、二
八月	二九、〇	一四、六	二二、〇
九月	二六、四	七、五	一九、〇
十月	二〇、三	〇、九	一二、五
十一月	一七、一	(一) 七、一	六、二
十二月	一四、六	(一) 一〇、七	〇、〇

六

七

全年

二九、〇

(一) 一四、〇

八、八

(一)は氷点下の畧符なり

函館の夏期冬期氣温の較差、並に晝夜氣温の較差は、之を札幌、旭川に比ぶれば甚だ尠ない、是れ蓋し地勢上温度の變化の比較的少いのは、海上氣象の緩和作用に據るもので是が恩恵に浴すること比較的多いのである

函館の風速度は一秒時に付いて平均全年五、四(十七尺八寸二分)で十一月から翌年の三月に至る五ヶ月間が強い、其他の七ヶ月間は比較的弱い殊に六、七、八の三ヶ月は特に弱い、風向は十月から翌年三月迄の六ヶ月間は北乃至西風が卓越して四月下旬頃から風向は變化して來る、五月から九月まで東乃至南東の風が卓越して強暴な風は、東西兩方及び南西のものに多い、そうして東乃至南方の風は暖季に多く概して冷濕で、是が連日に亘る時は、農作物に大害を興へる西風は冬季に起る尙ほ南東間の風は雨を帯びて嵐に變ることが多い

◇ 空氣の濕度は全年平均七十八パーセントで十一月の六七が最も少なく十月及三四月の頃之に次ぐ其最多いのは、七月の八六で八月六月之に次いで居る要するに夏期は甚だ濕潤である

◇ 降雪は平年十一月四日で終雪は翌年四月十五日であるが、歲に據つて十月下旬既に初雪を見ることもあり、亦稀に五月に這入つて終雪に逢ふこともある、降雪日數一ヶ年約百五日ではあるが逐年其數を縮めて居る

上下水道と傳染病

飲料水が如何に都市衛生に密接の關係を有するかは、敢へて論を俟たないチブス、コレラの如き傳染病の文明國に流行すべからざる惡疫の存在は一に飲料水に發生するのである、即ち都市生活に在つて井水を飲用するなどは實に危険な話で、甚だ非文明的のものとして排斥しなければならぬ、其の昔は問はず赤川を水源地とする函館水道は實に因を開拓使時代に發して居る

明治二十一年六月愈々萬難を排し起工し、次いで二十二年十二月始て完成するに及んで、市民は潤澤な淨水を使用するに至つた、此時市内に堀井戸五百七十二個所と、以て其むかしが思はるゝではないか

然し其當時は六萬人を標準としたものであつたが、市の膨脹は日に月に加はり、人口また數年ならぬに六万を突破するに及んで水道の擴張が高唱された、そうして十五萬人を標準とする計畫が實施さるゝに至つた、更に大函館に供ゆべく二十五萬人を標準とした大擴張が三百數十萬圓の豫算を以て着手された、その工事たるや實に我國に於ける最初の試みで亦誇るに足るべき成績を擧げたのである、そうして此の完成は市の衛生上に一大進歩を來たしたのであつた

下水と衛生思想

下水道は上水道の如く直接的のものではないが、衛生上より觀る時は、決して上水道に劣らざる態の必要條件なのである

下水の設備が不完全なるが故、微菌の培養を餘儀なくすることになる、函

館市の下水、現況は財政の關係もあらうが全く無關心の状態に置かれて居る是れ市民の間接に衛生思想に乏しきを語る大なる理由なのである、一の避病院を有すと雖も更に本道に於ける首位の模範都市として朝野の考慮を煩すべき点であると思ふ

左に傳染病統計を示す大正十二年度成績

病名	種別		發生	全治	死亡
	女	男			
腸チブス	四	六	一〇	三	一
バラチブス	一	一	二	一	一
ヂフテリヤ	六	五	一一	六	四
猩紅熱	三	六	九	二	〇
赤痢	一	三	四	〇	一

一〇

痘瘡	合計		醫師	齒科醫	藥劑師	産婆
	女	男				
合計	二七	四	二一〇	三	四九	二〇一
而して當市に於ける開業醫の數は			二一〇	三	四九	二〇一

公園

都市を以つて身體に摸するとすれば、公園は即ち肺臟である、不潔な空氣と、馬糞塵萬丈の風から享ける都市生活の苦惱を醫さそうとするには、清緑の淨氣に包まれた公園に俟たなければならぬ
人の造る都には、神の殘された田園を保存するといふことは重大な意義なのである、故に世界の都市經營者は、之の意味に在つて公園の建設に力を盡されて居るのである

總地積一万四千六百有餘坪を有する函館公園は、明治十一年に修築してか

ら漸次修理を加へ見るからに内臓の血を躍らす緑樹鬱蒼の臥牛山を背景に、自然化して居る五十年の努力は、十五萬市民の血を洗ひ淨め、ろうして市姿を飾るに充分なるところの美景である

更に一個所古戰場として晝尙ほ人を魅するてふ大自然の風姿を有つ、五萬四千百二十坪よりなる五稜郭の存在は、實に函館市民の幸福で亦他市に誇るべき市寶の一つである

建築と市觀

「火事を誇る江戸の花」てふ時代錯誤が或る何ものかを暗示した進化を意味する皮肉であるとしたならば、函館は確に江戸ツ子の集團で、大江戸のほこりを持つ都會である

さあれ十數回に互る大火は、其都度我が函館に歐米風の様式を輸入せしめ、そうして建築界に長足の進歩が現はれたのである、耐火本位に設計された洋建築は先づ帝都の銀座格とも評すべき第一火防線に油畫として觀るも恥しからの畫題を提供するに及んだ

浦潮の都市——其内容は今日の處甚だ貧弱な空都に等しいものではあるが建築物を背景にして觀る市姿は地形の關係上頗る函館に類似して居る、否な函館が似て居る、それは洋建築が多いから立派な都姿であるといふのではなく、時代の要求に相應しい建物が、あの雪國に適しなかつた不完全な日本建築を驅逐した鮮な統一振が即ち今日ある函館市の美觀なる所以なのである

過去の東洋道徳は衣食住を定義として出發して居るが、現代人は既に食住衣といふやうな要求を其思想の上に現はして來て居るのである、實際都會人は、一口に田舎と下卑して了ふが、都會が膨大であればある程層が是に比例して伴ふのが現代都市の實狀である、東京然り、大阪亦贅言を要さない

悠うした見界に立脚して函館を評するか、大災に次ぐに大災を以てした大犠牲は即ち市民に力強く復興熱を植え付けたのである、かくて市街は好奇を唆るべき建築物がない代りに亦贅言すべき態の新建物もない、要するに市姿としての美觀は均等された直感美に存するのである

唯だ此の市に對して私は希望する更に一步努力して街路樹の色彩を施されたいことを

教育と學校

高等學校のないといふ一事を以てしても如何に市民は教育といふ問題に對して無關心であるかと言ふことが首肯さるゝであらふ、然して學齡兒童は年々二千名の増加を呈示しつゝある現況よりして義務教育に二科制の苦痛を偲ばざる可からざるに到つた、左に所在學校を擧ぐれば

幸尋常小學校、常盤尋常小學校、彌生尋常高等小學校、函館女子尋常高等小學校、住吉尋常高等小學校、寶尋常高等小學校、第二東川尋常小學校、東川尋常高等小學校、新川尋常小學校、高砂尋常小學校、若松尋常高等小學校、松風尋常高等小學校、巴尋常小學校、龜田尋常高等小學校、千代ヶ

岱尋常高等小學校、私立鶴岡尋常小學校
 以上在學兒童數尋常科男一万一名、女九千七百六十四名、高等科男一千九百十二名、女一千百七十名、合計尋常科一万九千七百六十五名、高等科三

千八十二名である、外に私立尋常小學校男百五十三名女、百四十六名である

中等學校 (廳立)

校名	現在生徒數	創立以來ノ卒業生數
函館師範學校	五七六	四二三
函館中學校	八八五	一、〇二一
函館商業學校	九〇三	一、四九三
函館商船學校	一四八	三九九
函館工業學校	二二三	〇
函館高等女學校	八三二	一、一八七
函館商業補習學校	一〇五	六一二
外に市立夜學尋常小學校二、補習校一、私立のもの十校及び盲啞學校一あり		

更に教育費の豫算を觀るか大正十二年度に歳入四百二十三萬三千九百五十圓、歳出經常部一百二十萬九千一百二十三圓、臨時部三百〇二萬四千八百二

十七圓である

授業料は尋常科一人一ヶ月二十錢、高等科一圓となつて居る、而して教育費一戸當負擔額金十一圓九十一錢といふ割合である

娛樂機關の設備

今日稱ふる衛生の範圍内に、否な純然たる衛生の一部として娛樂事業の加味されて居ることを忘れてはならない、即ち精神的慰安りれである、公園が衛生的で修飾的でまた教育的であるやうに、娛樂事業は衛生的教育的なのである、我國の都市は未だに娛樂事業を保護する程に財政上の餘裕を有たないと同時に、都市は公園を經營するに於て足るてふ程度で娛樂事業を經營すべきものであるといふ理由を了解して居ない点にも據るのである

然し歐羅巴諸國は既に早く此の方面に力を注いで居る、中でも獨乙は特に力を盡し都市の設立した劇場が四十以上に達して居る、獨乙以外の都市としては佛國の巴里、伊太利のローム、ミラン、ボロナ、メシナ、瑞西のゼニバ、バーゼル、葡萄のリスボン、希臘のアゼンス、露西亞のペトログラード、モ

スクワ、ワルソ等それである

都市が有する劇場は少額の賃貸料で個人に貸與するのである、そうして利益の保障を與へるのである、此れ觀覽料に制限を加へんとする目的にあるのである、此の目的たるや興行師を保護せんとするものでなく、市民を保護せんとする即ち觀覽料の低廉を要求するのである、茲に於て市民の多くは娛樂に對する負擔が減せられて慰安の目的が貫徹さるゝに至るのである

函館市は卒先して此の事業に着手するの勇氣がないが、若しこの事業にして實現を見るか、少なくとも我國諸都市にその範を示すに至ることと思ふ
目下函館市に於ける個人經營の劇場、活動寫眞常設館を擧ぐれば

巴座、錦座、惠比壽俱樂部、音羽館、大黒座、辨天座、朝日館、平和館
以上九座は時に活動寫眞を登場せしむるも重に演劇を以て營業政策の種目となして居る

萬歳館、蓬萊館、キネマ館、演藝館、錦輝館、壽館、電氣館、第二壽館、七福座

以上九館は活動寫眞常設館として和洋映畫を提供して居るのである

警察事故と刑務所

殺伐たる空氣の漾うて居るのが開港地の特長である、亦警察事故の多いのも比較的開港地に多い、大正十二年度の統計に現はれた數字に據ると。

種別	刑法犯	警察令犯	條例及規則違反	廳令違反	計
犯罪人	男 一、七五三	女 二四六	男 二九五	女 一、五〇〇	男 四、四〇一
合計	二、〇〇〇	四五二	八四五	一、六三五	四、九三二
種別	自殺者	被殺害者	誤死者	天災其他	計
變死人	男 二七	女 七	男 二	女 六	男 三
合計	三四	一九	八	四	一〇八
種別	猶ほ刑務所の統計を観るか	受刑人	勞役場留置	拘留	乳兒
在在所	男 五〇	女 二	男 四九〇	女 四	男 〇
合計	五二	二〇	四九〇	四	〇
計					一八

合計	五二	五一〇	四	〇	一	五六七
新受刑	男 四七七	女 三五九	男 五〇	女 〇	男 三	三八九
合計	五二	五一〇	四	〇	一	五六七
出所	男 四四〇	女 四九	男 五三	女 五	男 三	八九
合計	四七九	五〇七	四八	二	五	一、〇四一
作業延人員						
工錢額						

所在人作業	男 一、五三八、七二〇	女 六三、〇三〇	合計 一、六〇一、七五〇
工錢額	男 四〇三、八八八	女 九二、九〇一	合計 四九六、七八九

消防組織

毎年市歳出豫算項目中の前頭位に列する警備費——即ち消防費は大正十三年度に於て拾貳萬四千百三十四圓といふ額が現はれて居る以て其規模組織の

尋常一様ならざる擴大さが測知せらるゝであらふ、實に函館市に於ける消防設備は都市經營者の見學に價すべき體の完成實物標本である、故に北海道視察者の日程には必ず函館消防本部見學の條項を觀ると

元來文明都市とは、流行病、乃至大火の出現せざるを以て言ふ、即ち之等は人力を以て防止し得るが故に設備奈何に係はるものであつて、都市生活が人生の最大幸福を目的とする以上は是が防止に努むるは當然なことである、今函館消防署の設備を見るに三万二千圓を投じた唧筒自動車三台、二千八百五十圓を要せし水管自動車四台、デニス式唧筒自動車一台各台五千圓、更に三千圓價格の蒸汽唧筒三台、外に破壊道具車五、救護車一、火災報知受信台三個を配備し、百四十一名の常備員を以て警戒の任に當つて居る、加ふるに帝都すら、試験時代に屬せしM M式火災報知機百三十五台を設置し延長線路實に二十五哩と言ふ大計畫を既に實現して居るのである、以てその大半を窺ふに足るであらふ、之れ確に他市の模倣を許さざる處にして亦見學に價する所以の權威なのである、更に以上の設備費は全部市民の愛市心よりなる寄附金にて完成したることを想ひば誰か學ぶ處の大なるを知らんやである、今一

覽表を以て函館火災記録を示すか左に

火災原因年表 (著名なるものと前年度比較)

年別	放火	煙筒	洋燈	爐火	弄火	焚火	捨灰	葺殼	提灯	炬燵	其他	計
大正二年	一八	一五	五	九	一	四	三	五	五	一五	一〇	九〇
三年	〇	一九	五	八	二	五	二	一	三	一九	一九	九三
十年	一	八	二	一	〇	五	〇	四	一	一五	一八	五六
十二年	三	八	〇	六	一	二	〇	二	〇	一〇	一九	五二

火災度數及損害 (著名なるものと前年度比較)

出火度數	棟數	戸數	坪數	損害建物	其他	計
二年	二〇	七四二	一、九三六	四一、二〇〇	四七〇、二七四	二二二、九二七
三年	二二	九六五	二、六〇九	二五、〇三九	四六九、七五八	三三〇、七三二
九年	一六	三一	五一	一、九六一	二九五、六七一	五九二、六五〇
十年	二〇	一、三五四	二、二二二	五五、六二二	八七八、四四四	九九三、二三三
十二年	三三	三九	六八	七六	一六、六三〇	一三、四八〇

社會事業一般

社會事業といふ問題は日本全体そのものが、漸々近代に及んで一般から問題視さるゝ様になつて諸種の機關、乃至は設備といふやうなものが實現さるゝに至つたのである。

函館には目下一の市營住宅と一の職業紹介所と一の公設市場を有して居るに過ぎない、市營住宅の建坪は六百九坪、棟數十一棟、戸數にして五十八戸重に勞働者を收容して居る。

公設市場は店舗二十軒各種日用品の賣店を網羅し、大正十二年度に於ける入場人員延數四十五万二千百三十八人、賣上高三十八万〇六百八十一圓といふ統計を示して居る、亦職業紹介所の成績を見るに求職人員合計七百十名内男六百七十一名、女三十九名で求人々員計八百二十八名内男七百七十八名、女五十名で就職人員が男五百名、女十九名、合計五百十九名といふ好成绩を擧げて居る。

市當局者の抱負としては、社會館建設の急なるを計畫して居るが、之に要する工費金二十万圓の出處に就いて目下惱んで居るといふ事である。

市有財産と徵稅成績

函館市の市有財産は幾何あるか、それは興味ある問題で少なくとも函館市民として知らねばならぬ數字なのである、左に

土地	地積	時價
101、644、34	坪	2、844、336圓
733、00	反	
總坪數		
23、623、45	坪	1、626、785圓
4、343、33	間	
有價證券		13、800
預金		143、944、16圓
合計		4、658、865、16

以上の様な財産を函館市民は所有して居るのである、が市債のあることも知つて置かなければならないのである、その市債とはどんな物であるか

	借入	濟額	一時借入
上水道擴張及舊債借替	一、二七三、六〇〇圓		一、九三三、四〇〇圓
學校新築及増築費	三六七、〇〇〇		二七六、〇〇〇
函館病院増築及改築費	一八六、〇〇〇		〇
市營住宅建設費	六〇、〇〇〇		〇
住宅組合貸付資金	四〇、〇〇〇		〇
災害事業費	八四六、〇〇〇		〇
療養所建築費	一五、〇〇〇		三五、〇〇〇
精神病院建設費	〇		六〇、〇〇〇
合計	二、七六六、六〇〇		二、二八四、四〇〇

差引を立てると結局四十一万二千百三十四圓八十四錢の借金といふことになるのである、然し市民が誠意を披瀝して諸税を完納するに於ては數年ならずして此の赤文字を埋むるに至るのである、何んとなれば

二四

二五

市税として賦課額一百七十七万三千三百八十七圓十九錢に對し實收入一百二十九万六千六百二十七圓〇七錢

地方税として賦課額六十一万一千三百八十九圓十七錢に對し實收入三十二万六千三百六十二圓九十九錢國税として賦課額七十六万一千四百一十一圓十七錢に對し實收入五十八万四千八百〇八圓十二錢、以て知るに足るべし

(以上大正十二年度)

大正十三年度市歳入出豫算

一、般 會 計 (歳入ノ部)		寄附金
財産より生ずる收入	五、七〇圓	三六、八〇〇圓
使用料及手数料	一五三、六四八	〇
國庫下渡金	四九、五五四	一三四、五〇〇
交付金	三一、二〇二	〇
報償金	二二、八八七	〇
國庫補助金	五三、六七六	一、二三六、九一一
地方費補助金	九、〇三四	五、九七七
計		三七一、〇〇〇
		二、一七五、七四三

經常部 (歲出ノ部)

役所費	一九九、一〇〇圓	公園費	八、四五三圓
會議費	七、九五〇	公會堂費	三、二四八
土木費	七、〇二一	墓地火葬場費	一〇、八六五
小學校費	四三四、七九八	勸業費	七、五三一
工業補習學校費	一九、一六〇	社會專業費	六、五八〇
傳染病豫防費	九、六三五	警備費	一二四、一三四
トラホーム豫防費	二、九七〇	財產管理費	三三、七九〇
汚物掃除費	八六、四二三	諸稅	四、八二二
病院費	六四、八〇六	神社費	、三八七
公金取扱費	二、二六〇	雜支出	四二、六三八
豫備費	三三、八八二	計	一、一七四、四四三

臨時部

新營費	一〇八、七〇四圓	土木費	九三、六〇〇
-----	----------	-----	--------

二七

公債費	五七〇、四九八	補助費	九、〇〇〇
市道改築本年支出額	二〇七、九九〇	調查費	一一、五〇八
計	一、〇〇一、三〇〇	合計	二、一七五、七四三

十三年度特別會計

函館病院費	三三六、〇〇四圓	歲入	三三六、〇〇四圓	歲出	三三六、〇〇四圓
基本財産	二〇〇		二〇〇		二〇〇
施藥救療資金特別基本財産	七二六		七二六		七二六
慈善事業資金	二二七		二二七		二二七
賑恤救濟資金特別基本財産	一、四二二		一、四二二		一、四二二
社會事業資金	六、五〇八		六、五〇八		六、五〇八
水道費	二、二七六、〇九六		二、二七六、〇九六		二、二七六、〇九六

金融と銀行

金融状態は従來の習慣では商業道徳が頗る向上して富商間に在つては一月以内一万金前後の貸借には、抵當も採らず亦利子もつけず、お互に心持ちよく融通したものであつた、亦一般商人間でも一度信用を博せば口約で資本を借られた、此れ開拓使時代に於ての函館商人の美風を語るもので、そこに共力を意味する殖民氣分が遺憾なく發揮されたものと評さざるを得ない。今日尙ほ老富商の内には此の美風を傳ふる者がないでもないが、然し債券の當籤を待つに等しい一場の夢物語である、ろうして惡風であつた、漁民の仕込に不廉な物品を提供して其收穫物を低價に見積り決算するといふ改廢を要すべき惡遺物が殘存して居る。

さあれ金融界は海産物、農産物の出廻季即ち十月以降並に權太露領方面に對する漁業仕込時の十二月前後と是が集散期に在つて頗る活氣ある繁劇を現出するのである。

手形交換高

(單位錢)

年次	總枚數	總金額	不渡枚數	不渡金額
大正十年	三二四、六七三	二二四、五七七、四二五、三五	五五	九一、九三三、三三二
大正十一年	三一五、〇四三	二〇〇、三〇四、五八一、〇六	一〇三	二三、三六九、〇六
大正十二年	三五一、四六三	二〇一、〇七四、四七〇、一四	一三九	七七、九一六、八一

銀行から見た金融 (單位圓)各年十二月末尻

預金 貸出

年次	定期	當座	特別	其他	合計
大正十年	一五、〇三〇、八四四	七、三三二、〇五一	八、二一六、三一四	三、三〇六、九六六	三〇、八四一、三一九
大正十一年	一五、六六六、六七二	五、七七五、〇六〇	四、三八六、四五三	六、五九一、一六六	二九、八七一、九七七
大正十二年	三二、四一九、三五	三、七八六、一七五	三、三〇六、九六六	三、三〇六、九六六	

大正十二年度

定期	一三、七〇六、七〇八
當座	一、七〇四、九八〇
特別	〇、二七〇、〇〇〇
其他	三、〇九二、七五〇
合計	一八、七七三、六三六

三二、一六二、九二六

所在銀行名と資本金

株式會社百十三銀行

設立 明治十二年一月
資本金 四百萬圓
拂込資本 三百七十五萬圓
積立金 一百萬二千五百五十圓
本店 函館

株式會社函館貯蓄銀行

設立 明治二十九年七月
資本金 五十萬圓
拂込資本 五十萬圓
積立金 十六萬圓
本店 函館

株式會社北門銀行支店

設立 二十九年三月
資本金 五十萬圓
本店 共通
拂込資本 三十八萬二千五百圓
積立金 二十六萬五百圓
本店 札幌

株式會社日本銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
明治二十六年四月
六千万圓
三千七百五十万圓
五千九百三十八万五千圓
東 京

株式會社第一銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
明治六年九月
五千万圓
三千六百三十五万圓
三千七百五十万圓
東 京

株式會社北海道拓殖銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
明治三十八年四月
二千万圓
二千万圓
三百七十四万六千四百圓
札 幌

株式會社安田銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
大正十二年十一月
一億五千万圓
九千二百七十五万圓
四千五百五十八圓
東 京

株式會社五十九銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
大正四年十月
一千万圓
四百六十三万七千五百圓
一百七十六万六千圓
弘 前

株式會社十二銀行支店

設本店共立
資本金
拂込資本
積立金
大正十年七月
一千万圓
六百二十五万圓
一百七十八万圓
富 山

株式會社安田貯蓄銀行支店

設
本
資
本
店
共
通
立
金
明
治
二
十
九
年
十
一
月
四
百
六
十
三
万
五
千
圓
二
百
四
十
二
万
二
千
五
百
圓
八
十
三
万
九
千
圓
東
京

株式會社共榮貯金銀行支店

設
本
資
本
店
共
通
立
金
明
治
三
十
三
年
二
月
一
百
万
圓
三
十
二
万
五
千
圓
十
一
万
六
千
圓
東
京

株式會社不動貯金銀行支店

設
本
資
本
店
共
通
立
金
明
治
三
十
三
年
九
月
二
百
万
圓
二
百
万
圓
三
百
五
十
万
圓
東
京

企業界及工業

商業より工業へと企業界は擴大される近代の傾向は獨り函館ばかりではない、昔は鐵と石炭の無い處に工業は勃興しないものゝ様に極めて居たが、現代は工業の在る處に石炭と鐵は集中する様に變態して來て居る、而かも輸送上利便ある處に於て更に然りである

即ち函館船渠會社、函館水電會社、乃至は瓦斯會社、肥料會社等、陸續として隆起して居るそれである

そうして工場を有すること共數二百十五、職工三千六百七十六人、此の生産額實に一千二百〇五万四千二百四十圓といふ巨額な數字を大正十二年度の統計は現はし居る

交通

凡そ世界の何れを問はず、一國一村を論せず土木事業なくして文化の恩恵は浴さない、實に土木事業は文化の先驅である

函館は本道最要關門の地位にありながら鐵道事業に就ては札、樽間のそれに比較して甚だ縁が薄かつた、でも折衝幾多の曲折を経て明治三十五年六月に起工した函樽鐵道は、全卅七年九月に到つて工事の完成を觀、十月十五日を以て盛大な開通式を舉行し、茲に始めて総延長百五十八哩七十七鎖の運轉開通を見るに到つたのである、斯くて四十年國有となつた

是の函樽間鐵道の開通は、其沿岸の開発を援けたことは勿論、沿道各地の商權を兩分して、函館は少なくとも黒松内以南に於ける實勢力を確實に把握するに至つたのである、今亦國縫驛より瀬棚に至る分岐線は、今年度を以て着手すべく長萬部間は目下工事着々として進捗し、來る大正十五年度を以て完成の豫定である、此他五稜郭驛より分岐して上磯町に達する鐵路は、近き將來に於て福山及江差に延長さるゝ計畫になつて居る、亦函館市から戸井を経て半島東岸白尻に至る道路の開通も近き將來のものと思倣されて居る

函館水電會社の經營になる電車事業は市内唯一の交通機關で之が動力は水

火併用八千六百キロワットを有して居る、大正十二年十月市内及湯川線を開通し、業務區域線長十六哩余、車輛五十五台を運轉し、電燈電力の供給をも併營して居る、賃金は市内均一制にて市外のみ區制を行つて居る

湯川線は由來等級別の車輛を運轉して區別ある賃金を徵集してあつたが最近に及んで從來の級別を廢し全部均等席となすなど、専らデモクラシーを發揮し運行能率の増進に努められて居る、尙ほ自動車便もあるが、うは餘りに少數で寧ろ函館市として奇異な感を抱かしむる程に物淋しい實狀である

航 路

航路といふ語に種々の意味のある事は言ふまでもないが、航海技術上に謂はるゝ航路は物質的の意味で經濟法律の上から觀る航路は聯絡といふ事を主として居る

西曆一千八百四十年に合衆國の海軍士官モーリーが風と潮流を研究して、世界各地には始終一定の風と潮の在る事を公表した、之れより帆船の航海は始めて科學的となり正確を期するに到つたと歴史は告げて居る

さあれ函館港を中心に開かれて居る航路を舉ぐれば

北海道廳命令航路

函館根室線

函館伏木線

函館森線

函館小樽線

函館釧路線

函館日高甲線

函館日高乙線

樺太廳命令航路

東海岸伏木線

釧路、厚岸、根室

直江津、伏木

戸井、日浦尻、岸内、古武井、根田内、
根法華、磯谷、古部、木直、川汲、
尾札部、白尻、鹿部、砂原、森、

江差、釣掛、瀬棚、壽都、岩内、余市、
小樽

小越、庶野、猿留、音調津、廣尾

幌舞、後邊戸、浦河、様似、幌滿、
幌泉

佐留太、門別、厚別、新冠、下々方、
把別、春立、三石

伏木、大泊、富内、榮濱、東白浦、登帆、
馬郡單、元泊、東知取、泊岸、内路、
敷香

月四回 島谷 瀛船

月四回 全 成田商會

月九回 北海 郵船
坂店 豊邑回漕店

月十回 藤山 瀛船
坂店 宮本回漕店

月四回 金 森 商 船

自二月至十月 六回 全
自十一月至一月 四回 全

自二月至十月 五回 全
自十一月至一月 四回 全

月二回 北海 郵船
坂店 豊本商會

三八

三九

擇捉命令航路

上内保、留別、沙那、別飛、藥取 不定期月三回 千島 瀛船

遞信省命令航路

關門兵阪線

下關、門司、兵庫、大阪

月六回 北日本 瀛船

全 尼 港 線

小樽、大湊、真岡、亞港、尼港

月二回 全 坂店 共同回漕店

全函館勘察加線

東カムチャツカ

月一回 栗林 商 船

海 運 界

海運の經濟的特質は一言に言へば競争の激しい事で、蓋しこれ程世界的に全世界の船舶の需要供給に刺戟せられる業務は稀であらふ

さあれ當地の海運界は歐州戦争當時の稀有の上景氣を呈した經濟界の形の影に添うに等しい活氣を現出したが、休戦と共に財界の餘波を受け頗る振はざるの體である、然し船籍を函館に有するもの大正十一年度に在りて汽船一百四十七隻、五万三千六百七十九噸、帆船九十四隻、九千〇八十七噸、大正

十二年度に至りて汽船一百四十九隻、五万三千〇八十三噸、帆船七十九隻、七千二百六十三噸を有つて居る
 尙ほ在籍海員は一万〇〇三十七名で内高等海員一千〇〇七名、普通海員九千〇三十名である

函館港在籍船舶表

種別	十一年度		十二年度	
	隻數	噸數	隻數	噸數
自二十噸至百噸級	五二二	二、七七八	六六	一七、三〇〇
	五一二	二、三一八	四三	六、七六九
自百噸至五百噸級	一〇三	五、〇九六	一〇九	二四、〇六九
	五六	三、〇一九	六四	一六、五九四
自五百噸至千噸級	四	〇	一	〇
	〇	〇	〇	〇
千噸以上	〇	〇	〇	〇
合計	一〇三一	四、九九二	九八	二一、八八五
汽船	五二二	二、七七八	六六	一七、三〇〇
帆船	五一二	二、三一八	四三	六、七六九
合計	一〇三	五、〇九六	一〇九	二四、〇六九

更に出入船舶統計を検するか

大正十一年度

出港	入港	隻數		噸數	
		内國船	外國船	内國船	外國船
合計	合計	八、一四七	三〇	五、二一八	三五六
内國船	内國船	八、一一七	〇	五、一一二	九七七
外國船	外國船	二八	三〇	一〇五	三七九
合計	合計	八、〇七三	二八	五、〇七〇	二八二
内國船	内國船	八、〇四五	〇	五、〇七〇	二八二
外國船	外國船	二八	二八	一〇六	八五八
合計	合計	五、三三五	三三	五、一四〇	一四〇
内國船	内國船	五、三〇二	〇	五、四九六	五七七
外國船	外國船	三五	三三	八四	〇〇三
合計	合計	五、五二七	三五	五、五八〇	五八〇
内國船	内國船	五、五二七	〇	五、五八〇	五八〇
外國船	外國船	三五	三五	八四	〇〇三

商港と貿易

今日の商港は昔のそれと解釋を異にして居る即ち船舶の碇泊に堪へ得る水面だけでは商港としての任務が果たせなくなつたのである、而して更に條件として港備の一條が資格の内に求めらるゝに到つた、即ち貨物揚卸、貯藏運搬等の設備が完備されて始めて商港たるの解釋となつたのである

函館港は天恵の地形を占め、更に商港としての重要航路に在り且つ背面地として農産地あり、水産物あるが故今日の侮るべからざる運送經濟の數字を示すに至つたものと評さなければならぬのである、而して是れを一般貿易として観るか、時に障碍なきに非らざりしも、比較的順調に發達したことは事實で此を其統計に照して観るに

貿易統計表 (於商業會議所調)

大正十二年度	輸出の部	大正十一年度
計	五,三二二,〇一〇円	五,七三五,〇三八円
合		四二一

四三

錫	一,二四九,八七六	八五一,一〇五
鱈	八七,三八〇	九四,七九九
鱈産魚	〇	八七,七六七
露他	九六九,〇七七	一,九六七,九七七
全其昆	一五五,〇八七	一,二一,八二二
昆	七九五,九七六	六九三,八二九
布	二六三,一七六	一八五,八八二
參	一七四,七六二	二二六,八六九
鱈柱	五二,四一二	三二,九三一
草	七〇二,九五〇	四一六,〇一〇
豆	二一,七一九	六七,五三九
元	一,一七四	六,五八八
實	六五七	四四四
及	一〇,七七〇	?
油	四,五九七	〇

濃蟹	粉	一,〇六八	三,八四二
罐	詰	二〇,九五六	二五,〇三〇
漁	網	一三,四五一	〇
セ	ト	二八,三〇八	〇
硫	黄	三,二七四	三五八
樹	皮	〇	六二,九二五
其	他	七四八,三四〇	八七一,一二五

輸入の部

合	計	一,七一一,三九九	三,二七五,六二一
食	鹽	六〇,五〇七	一,九七三,九四九
諸	料	一五三,四二四	?
石	品	二六九,七〇三	二五七,五一二
鉄	油	三五,二四六	一三,七二四
材	及	一六二,三〇四	九九,一三五
及	製		
機	品		
器	學		
及	術		
機	器		
械	及		
	機		
	械		

四四

燐	石	二七四,八二〇	一,一〇,〇〇〇
其	他	七五五,三九五	八一一,三〇一
輸	入	七,〇二三,四〇九	九〇一〇,六五九
輸	出		
合	計		

四五

従来奥羽地方及び北海道では開港場として存在して居たのは獨函館ばかりであつた、然るに明治三十二年七月小樽及釧路の兩港が一般開港地となり次いで三十六年一月室蘭が輸出品制限を撤去し且つ指定物品の輸入を爲す得るに至り、更に三十九年四月青森亦開港場の列に加はるに及んで、函館の貿易は蠶食さるるに至つたのである、然し海産物は資本關係上依然として函館に集中し、硫黄の如きは牢固として援くべからざる集散の實權を握つて居る

漁業貿易統計表

	大正十二年度	輸出の部	大正十一年度
合	計	七,五六九,七三三	九,一三二,三三八
米	料	六八一,五四二	三三,五一七
食	品	二,一三,三八四	三二,七一六

漁食全小	網鹽品	一,八三四,一三八	二,一一三,三四四
食全	外國品	八,七〇六	九三,六一一
小	丹品	四九一,九三八	二,一八九,七五四
製	品	六七〇,七四四	九一五
芋	製	三八〇,三八八	三六一,四二一
麻	繩	五二九,八二六	六〇九,一三二
鐵	製	四一四,二三〇	二二〇,〇六四
機	械	三五二,二九一	二三四,五八四
布	綿	一五四,六一五	一五〇,七八一
木	吳	三三七,四六九	一六七,七四〇
木	材	八二三,八六八	七三九,一三六
石	炭	一二二,九六三	一〇〇,三六六
其	再	四六六,六七六	四六二,二二一
輸	出	八八,二二二	二二,〇三三
品	計		

四六

輸入の部

計	一三,八九四,九一三	一三,八八六,七九六
銜	六,七六七,九八一	六,九二〇,〇五三
鐘	二,二二七,八九八	三,三五四,四二九
類	一,八九一,一七六	七九八,四四二
子	七七五,〇二〇	一,一二二,九一七
粗	二〇七,二二二	四一一,九三五
他	七二八,二六七	九六,八五八
品	一,二九七,三三九	一,一八二,一六二
計	二一,四四四,六四六	二二,〇一九,一三四

四七

倉庫業

商港の資格としては船舶の出入碇泊に對する設備は勿論なれど更に貨客揚卸、貯蔵、運搬に關する人工的設備なくんば近代的商港と稱するを得ないのである、幸にも函館港は背面地の交通聯絡、それ好く輸出入政策と歩調を保

ち倉庫亦宜しきを得るが故に不斷の努力を以てせば有利の地位を失ふが如き
 ことはない、左に營業倉庫數を示せば

石	煉瓦	鐵筋コンクリート	板倉	木屋	上	計
棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟
三	五	二	二	二〇	二七	九二
坪	坪	坪	坪	坪	坪	坪
二五七、〇〇	一〇、三七一、五〇	五四〇、〇〇	八二、〇〇	一、五〇五、〇〇	二、五五七、八九	一五、三三三、三九

外に保稅倉庫を有す

營業倉庫物品出入統計

前月末有高	大正十二年度
六三六、二六四	庫入
四、八六九、二七	庫出
四八	四、九五三、八八

大正十一年度	四、四二二、二五二	四、六七二、七七五
不明		

保稅倉庫物品出入統計

大正十二年度	倉入	倉出
前月末有高	一、〇三五、三三九	二、七四八、三三九
大正十一年度	二、七四八、三三九	二、五三二、六〇一
不明	一、九六八、八七七	四、三〇一、二五五

漁業と其影響

一に商業二に漁業と謳はるゝ函館は漁業の豊凶こそ眞に死活を制する財界
 のバロメータである、土地の漁業としての鯧鯔の如き夙に開けて居る漁法は
 既に發展の餘地がない、只群來の濃薄によつて收穫の増減を觀るに過ぎない
 が對外漁業に至つてはるの齎す處の數字直接間接市況に反響を與へて居る

露領漁業種類別收穫高

向つて右十二年度左十一年度

西 南 區	鮭		鱈ノスケ		紅鱈		鱈	
	石	三、七二	六七、四六	〇〇	〇〇	一、六七三、九二	四五四、三四	〇〇
オホトスキ	四八、五四五、二七	七六、七〇〇、七六	〇、五〇	二四二、七二	四四二、〇四	九、五一〇、〇三	二一、〇二五、八九	八〇、六一〇、一〇
イチンスキ	二四、〇一六、二二	二四、〇一六、二二	二、四八八、七三	二、四八八、七三	二、四八八、七三	二、四八八、七三	二、四八八、七三	二、四八八、七三
西 勘 察 加	三一、三九九、〇八	一六、二七二、四九	二、二二	七、二五六、八五	三三、八七四、八四	二八、一三〇、八五	二八、一三〇、八五	二八、一三〇、八五
東 勘 察 加	一〇、二三九、〇四	三、八〇七、五〇	六〇二、八五	二五、四八二、二九	六、四六八、四一	〇〇	〇〇	〇〇
カラギンスキ	一、六九三、八三	九、一一三、八九	一、四五〇	二二七、一八	三七〇、二七	三二、四八〇、八九	四、七四〇、〇二	五〇

オリユートル 六八八、五八 五、〇〇 一五七、〇六 二、七九七、六〇
 ナワリンズキ ナ シ

合 計 一二六、四二一、〇六 一〇四、三三二、六六一 一四六、一一一、二四
 一二九、九八五、三三 八四〇、四三 四三、六四四、〇三 三七六、五七四、四〇
 外に十一年度にあつては一一、一〇五、九四の鯨粕及雜粕と露國式筋子八、
 二八貫目日本式筋子五九六、九一八貫を收穫し十二年度には鯨粕及雜粕七、八
 三四、八七及粒鯨九八、六〇筋子五四五、二四八貫を收穫して居る

樺太漁業種別收穫高

右大正十一年度左全十二年度

專用漁業	鯨	鱈	鮭
三、九三五、四一〇	八一、四八〇	八、三一六	七、九一三
三、七七七、〇九五	五三、〇九〇	二七九、四三六	三八九、五〇二
三、四六六、五六四	一、四九九、六七〇	二七九、四三六	三八九、五〇二
二、六八三、三六一	四六二、四四〇	二七九、四三六	三八九、五〇二

定置漁業 近時蟹鱈等の收穫著名となつて十二年度には蟹鱈詰六、一七〇函 二百三十
 九万三千七百七十二圓鱈百二十二万八千六百二十六貫此の價格實に百七十五

万五千九百七十三圓といふに至つて居る
更に擇捉島の漁業状態を見るに

	十一年度	石	鮭
定置漁業	一四、二三〇	七、五〇九	
十二年度	三〇、〇〇〇	一三、〇〇〇	

而して此他鯨、海藻類及び二個所の捕鯨工場を有する關係上鯨粕、鯨油等の製産亦尠なからざる數である
然し露領方面の漁場は年々減縮され十一年度二百八十場所であつたものが十二年度には二百五十四場所となり更に十三年度となつて二百三十四場所に減少されて居る、原因は魚漁の豊凶資本の關係にも據るであらうが對露問題の影響に預る處亦大なりと謂はなければならぬ

輸出海産物仕向地

對外仕向地は中華民國、關東州、香港、露國、英國などその重なる國であるが金額の上では中華民國が首位を占めて居る、大正十年度の輸出額三百六十九万八千二百三十八圓全十一年度四百九十八万〇〇七十一圓である
此外在函支商の手から直接發送されるものは組合の検査を要さないの統計には現はれて居ない

輸出海産物検査成績一覽

年別	品種	總數	合格	不合格
甲種 (外國向)	十二年度 諸罐	五五、九五〇函	五五、四八八	四六六
	十一年度 諸類	一二、五二八	一二、五〇〇	二八
	十二年度 海産	三一、七一六、二六〇	三一、七〇四、二四一	一一、八七五
	十一年度 諸物	三八、二一四、九五三	三七、六一一、七八八	六〇三、〇七五
乙種 (内地向)	十二年度 海産	一、三五九、一〇七	一、三五三、〇六四	六、〇四三
	十一年度 諸物	一、二六七、九九三	一、二六五、〇一八	三、〇七五

海産物仕建一覽

鹽鮭、鹽鱈は何れも二十尾を一束と云ひ三百束を以て百石と稱す
 塩鱈は二十尾を一束と云ひ六百束を以て百石と稱す
 生鱈は二百尾を一丸と云ひ三百丸を以て百石と稱す
 身欠鱈は百片を一把と云ひ二十四把を以て一本と稱し此の量目十三貫を以て常貫とし四千貫目を以て百石となす、此他胴鱈、鮫粕等の百石建量目亦之と同じ

干鱈は二貫五百目、貝柱、干鮑等は大概百六十匁を以て一斤とし十二貫目を以て一個と稱す尙ほ干鰯は二十枚を一把と云ひ七十五把を以て一個と稱す

農業と畜産

その昔は半農半漁なりしも現今にては殆んど商業、漁業、工業に進展し農業は微々たるものなり、然れども牧畜に至りては將來に嚆望するもの尠なからず

農業生産價額 (單位圓)

米	大豆	小豆	玉蜀黍	蕎麥	馬鈴薯	小麥	燕麥	其他
二、九〇三	七五	二六一	一、三四	四二〇	一六、六三七	二二〇	三三三	六五四

蔬菜類は蘿蔔を出頭に一万二千九百三十五圓、次いで甘藍の一万〇五百五十六圓、胡蘿蔔の六千三百圓、葱の六千二百〇五圓等著名なるものである
 更に畜産に至つては

牛の二百七十七頭、馬の一千百六十九頭、豚の七百頭、緬羊は降つて十一頭である

屠殺の状態を観るに當市は私營になる一ヶ所の屠殺所を有するのみなれども其屠殺數實に三千四百〇九頭なり、即ち一日平均九頭強となる左に種別すれば

屠殺頭數	肉量日	價格
成 牛 一、〇二八 匹	四一、七四〇 貫	一八四、七二五 圓

猪	二四	三、〇四三	九、七三八
馬	二七六	八、四八〇	三、八九二
豚	一、八三七	二八、六三三	九六、〇六七
羊	三三	二五	七四九
合計	三、四〇九	八二、〇一一	三〇四、一七一

此他家禽の生産額は少なくとも一万圓を降らざるべく鶏卵産額にても五万四千一百八十圓である

著名官公衙

名 稱	所在地	電話番号
函館地方裁判所	汐見町二四	二〇一
函館地方裁判所検事局	同	二〇一
函館區裁判所	同	二〇一
函館區裁判所検事局	同	二〇一
函館刑務所汐見町分所	同	一、五五九

五六

名 稱	所在地	電話番号
函館稅務署	全 二七	一二三
北海道廳渡島支廳	元 町 一	四三〇
北海道廳度量衡檢定所函館支所	全 一	一、二四二
北海道廳函館土木派出所	全 一	八八〇
函館警察署	寶 町 四〇	一、七五〇
函館水上警察署	仲濱町 一	一七六〇
函館臨時海港檢疫所	全 一	一七六
函館稅關	全 九	一七〇
函館刑務所	千代ヶ岱五〇	七五〇
函館重砲兵大隊	全 一	五〇一
津輕築城本部函館支部	全 一	五〇一
函館衛戍病院	全 一	三八〇
第七師團經理部函館派出所	全 一	一、七五四
帝室林野管理局札幌支局函館出張所	青柳町三四	一、七四九
函館郵便局	船場町一九	二〇〇

五七

函館一等測候所
 函館營林區分署
 鐵道省函館工場
 札幌遞信局海事部
 函館地方海員審判所
 函館北海道廳移住民取扱事務所
 北海道農產物檢査所函館支所
 函館要塞司令部
 函館聯隊區司令部
 函館憲兵分隊本部
 函館地方專賣局
 函館市役所
 函館商業會議所

海岸町埋立地 五七九
 大繩町一九 四五〇
 龜田村大谷地 二、〇八三
 鍛冶町三三 四
 全 四
 若松町驛構内 七八〇
 末廣町七九 一、五五八
 谷地頭町一〇〇 七三
 全 七六
 高砂町一九 五〇二
 真砂町一 三七四
 豐川町三一 二〇九
 豐川町三一 三〇〇
 豐川町三一 六一〇
 鶴岡町一 二一〇

神 社 佛 閣

國幣中社 函館八幡宮
 縣社 東照宮
 鄉社 龜田八幡宮
 全社 山上大神宮
 村社 嚴島神社
 村社 船魂神社
 全社 住吉神社
 無社 三吉神社
 全社 稻荷神社
 全社 豐川稻荷神社
 全社 海天神社
 全社 水天宮

谷地頭町
 蓬萊町
 龜田村
 船見町
 辨天町
 元町
 住吉町
 全
 全
 豐川町
 西川町
 東雲町

全 函館招魂社 沙見町

佛閣

真宗 函館別院 (大谷派本願寺) 元町

全 本願寺別院 (本願寺派) 東川町

全 萬年寺 (大谷派) 龜田村

全 興教寺 (佛光寺派) 全

曹洞宗 高龍寺 台町

全 秋葉堂 青柳町

日蓮宗 常住寺 相生町

全 實行寺 船見町

真言宗 高野寺 住吉町

全 慈尊寺 船見町

全 新法蓮寺 相生町

全 函館蓮寺 東川町

天台宗 天祐寺 春日町

全 善光寺 榮町

全 真言寺 台町

全 稱名寺 船見町

全 新善光寺 春日町

全 大稱光寺 龜田村

法華宗 本門寺 大繩町

時宗 淨光寺 龜田村

元町天主堂 元町

ハリスト復活聖堂 全

函館聖會堂 全

日本基督函館教會 相生町

函館キリスト教會堂 曙町

龜田天主教會
函館教館
救世軍函館小隊
日本メソヂスト教會堂

龜田地藏會
田藏菜所
村町町町

・新函館見物

港をながめての感想

大正十一年の今頃まで浦潮で暮して来た私にはこの港を沖から眺むるにつ
け、麵麩を興へて呉れた港の都が無性に戀しい。

不景氣になればなる程何營業を問はず先づ第一番に削減の斧を下さるゝの
は宣傳用の廣告費である、その最も薄命に在る最も重大視しなければならぬ
廣告を唯一の財源として豫算を組む刊行物業者は、その生活の基礎に於て山
師や海師のそれの様に頼り氣ない物哀れさを不景氣は曝露する

大日本帝國の外務省で審査の結果下附になる處の西伯利救恤金が、地盤喪
失の理由の下に一萬九千圓といふ申請をした、願書を觀た係の役人輩は何の
考慮もなく一驚したものと見え？審査の結果不可附に決定仕候といふ通知を
發するに至つた

二億萬圓近い筈の申請に僅か百五十萬圓よりない救恤金だから、貰ふた處
でその額は知れたものだと思ひながらも、引揚以來轉々流浪して、その日そ
の日の小遣ひにも不自由を感ずる食客の身の上になつてみれば百でも二百で

も此の場合懐中に入るといふことはこれに過ぎた有難さはないと思つて居た

◇

而かも千金と纏つて來るとなれば、これ迄微力ではあつたが對露關係に盡
した自分の努力がより強く意識さるゝのであるものをと信じた、そうして其
を更に有意義に働かせねばならぬといふやうな報國的觀念が實行の上には現は
れたものにと強く憎惡の感に打たれた。

自分といふ一代が金に恵まれない一生であると極つたら、物質を離れて、
切めて思想上に於て活甲斐のある生存を記念したいと惱ましく考へられる

誘はるゝ儘、東京を出て海猫の棲息で有名な奥州鮫の漁村へ來て、石田家
の二階に二晩ほど遊んで、眠から醒めたばかりの、露の滴るやうな緑の函館
へ來て——否な港の懷中に這入つて何も彼も忘れるやうになつた

それは私に——寧ろ過重な程の仕事が出來たからなのである、それは此の
一冊を纏めるといふ問題なのであつた。

富國の道程へ

區制時代に既に善く基礎が出来たとは云ひながら、市政を布いて三年、其短日月に在つて今日の市觀を爲すに至つたことは、世界の都市經營者に向つて誇るべき官民合同の舉市一致の美德に胚胎する賜物である、觀よ現今の帝都復興事業の遅々たることを、是を想ひ彼を考ふる時、私は轉た函館官市民に學ぶ處の大なるを覺ゆるのである。

さあれ市政を布く今日迄には、幾多の難問題があつた、水道事業にしても亦函館鐵道にしても、港灣改修に對しても、果た土木に關聯した市道改善にしても、その歴史は涙と力を以て彩られた武士道的の繪畫である、更に十數回の祝融は如何許か函館の發育に災したか知れない、然し市民は一難毎に强者の誇を示し努力の量を高めた、そうして富國の道程にある自躬自足てふ目標を發見したのであつた。

富豪の應揚

腕に馬力をかけた、潜航艇式商策に飛行機を加ふるやうな進歩がその努力

六六

の内に現はれて來た、漁業の仕込地として傳統的な基礎は愈々強固となつた、斯くて放資市として函館は大正十二年度末に三千二百十六万二千九百二十六圓といふ銀行帳尻を示して居る、更に全年度の手形交換高は二億〇一〇〇七万四千四百七十圓に達して居るのである。

六七

流石は資本家の多い都市、函館山を背負ふて泰然と構いた處は、同じ開港地ながら樽、釧、蘭に觀られない落着きさである、この沈着は亡びんとする悲哀に浮ぶ沈黙ではなく巨富を貯ふる富豪の應揚さなのである、こうした面影は商人にも、給料生活者にも、また日傭人の労働者にも具つて居る

あの活馬の目を抜くといふ東京から來て最も氣に入つた第一印象の美望である。

花形役者の露國人

開港史の第一頁に出る花形役者——それは待ち呆けをくわされた、幸四郎でもなければまた雁治郎でもない、それは露西亞人である、函館は露西亞を放れて擴大しない、言ふ迄もなく露領漁業はりの死活を制する體の密接な關係

に置かれてあるからである。

函館市街には可成多數の露國人が居住して居るらしい、その何れの街路にも漫歩して居る此國の人種に遭逢する、智識階級あり、労働者あり、そうして金儲を目的に居住して居る者と自國を避難して居る者と、船舶に關係して居る者が即ちその集團なのである。

ふと辨天町の海岸で煙草の火のことで、久々振に使つた露語の端緒から私は浦朝で逢ふた労働者の訴へが想起された。

彼等は、私の問に對して幾人も簡単に答へた、しかも同一な回答を！その問は外でもない。

◇
まだその頃は、非難の目標となつて日本軍が駐屯して居た時代であるから露國は赤白の二派に分離して鏑を削つて居た、赤の領分は曠く、白の領分は極限されて日軍の駐屯範圍を出なかつた、従つて白領土に生活する國民は職を失ふ者が多かつた、領地の割合に人口過多であつたからその苦痛は著大なものであつた、その頃に私は、赤色政府を迎ゆるか白色政府を擁護するかと

問ふたのであつた。

處が言下に、それは何れでも構はない、自分達に食を與へて呉れる政府ならば色は問題でないと異口同音に答へたのである、そうして何れの時代、何時の政府でも、國民と完全な共鳴を謠歌することは不可能なのである。

唯だ我々は死なうい程度に於て政府の保護を享けやうといふに過ぎないのである、政府また殺さない範圍に在つて責任を果たすといふに止まるのであると、——露國大革命は決して故なきことではなかつたのである。

◇
それと是とは別な問題ではあるが既に早く函館人を理解し吾亦彼を知るの關係に在る以上一視同仁を以てせなければならぬ。

國家と國家との親善は、吉澤カラハンの訓電交渉では纏まるものではない眞の國交は、個人と個人との經濟關係から産るものである、こうした國民外交に基礎を置く親善でなければ眞物ではない、外交官の文書で出来上つた親善は、日米紳士協約のやうに何時か破るゝの日が来る、茲に於て新函館は國家を代表するてふ大責任を以て彼等國民を優遇するの途を講せなければなる

まいと思ふ

自尊心の強い國民といふ點を吞込んで接觸すれば失敗はない、吾も人も同様、悲境に沈淪する時の感銘は終生忘れられるものではない、誠意と同情に及向ふ者はない筈である、彼等に悪感を抱かせないといふことは即ち新函館の國家に忠なる所以なのである

底力ある総ての風物

自分を知る自分、それに當然すぎる程當然なことであらねばならないのだが、歴史に残る人間は識らず、大正の娑婆では、無我境を見出すてふ静座道人でも自分の自分は判るまい、そうして自分を忘れて自らの陥穽に墜落して惱んで居る、此を想ふと確に昔の平凡人は今日の偉人なのである、この意味に於て私は函館に偉人の存在を知つた。

十五万人を抱擁する大都市、其處に帝都の模倣的鶉呑の不調和はあるにしても自己の實力を忘れては居なは、模倣せんとする都會化にゆとりが在る、詰り破産したと世間に噂さるゝ様になつて尙且つデリ／＼と十年の壽命を保

ち得るといふやうな底力が総ての風物に窺はれる。

浮調子な帝都のビルデングは華美に明るい、従つて奥行の線まで透し見えて心細い、それに反して函館は地味で暗いが線の奥行が想像できない程深くつて頼母しい、恰も大百姓の客間へ案内されたやうな感銘を享ける、若しそれ奥行が透し見えて心細いのが斬新な都會で想像できない程に深くつて暗いのが田舎であるといふやうな解釋が、現代思想の上から正鵠であるとなればそは何れの國、何れの都市を論せず亡國廢都に近づきつゝある第三期の徴候であると評さなければならぬのである、幸に函館は田舎に甘んじて居て呉れる

劇として観た新函館

末廣町の目扱の位置に建てられた比較的天井の高い或るビルデングの三階から眺むるともなく瞻瞰するコンクリート街には、夏の日に惠まれた強い北國の日光が流れて居る

ふと函館といふ映畫が私の腦に浮んだ、何と目先の變化する筋書であらふこの一本のフィルムには、時代劇もあり、世話劇もある、亦殺伐な戦争劇もあり、現代劇としての喜劇もある、そうして登場人物の複雑多種なること流石は寛政年間から舞臺装置に努められた開港地としての價値が首肯れる。

その昔康正二年志濃里の鍛冶屋村の鍛冶師に一蝦夷が小刀の製作を頼んだ聽て小刀成るや蝦夷と鍛冶師と刀の利鈍價額の高下から議論となり、鍛冶師の爲めに蝦夷は刺し殺された、此の小問題が導支線となつて蝦夷一族の憤怒を惹起し東は鶴川、西は余市に至るまでの和人を掠殺するてふ慘狀を極めた恚うした経緯から永正八年春四月函館（當時のウスケシ）に夷徒の乱を見るに到つた、そうして小林良定や今井季景などいふ武士を戦死せしめて居る

◇
そうかと想ふと「博多小女郎波枕」にでもあり相な海賊談や、寛政年間に起つた露船入港問題など、或は文化九年頃から一代の豪奢を極むるに至つた海船問屋の物語や、安政年間に突發した高田屋嘉兵衛を中心とする成金者流の榮枯盛衰の場面は、社會教育資料にならない迄も幾多の冒險を背景に鹽原

二代鑑にも劣らない藝題である、更に降つて明治初年の函館戦争は、此の港を擁して、今は古戰場となつては居るが、公園の五稜郭を舞臺に、あの猛優澤村訥子に書卸したいやうな立廻物で少なくとも三幕五場位はあるそうかと想ふと亦湯上りを着て足袋を穿くといふやうな耳隠女や、浴衣の下から麗々とした色物の襟を出して得々然として居る現代人の登場は、確に近代式な一場の喜歌劇である、斯うした大作は實に天治、大治の八百年を経る過古に遡らなければ書けないのであるといふことを想ひば、とても私達のやうな者の筆を染め得ない戯曲と評さなければならぬのである、況んやらの舞臺装置に於て舞臺監督に在つて！

◇ エサバは函館の愛護者

午後の八時九時になると、公園附近に住つて居る關係でもあらふが、山を巡る縁、海を渡る風、それらが名藥劑師の手に調合された高貴な藥品のうれの様に肌に内臓に、泌々を函館の有難さを注射する、六〇六のやうな惱みもなく六神丸のやうな苦味もなく——眞に緑涼海風は、聖ドクトル——函館の恩

恵なのである。

その頃から、「鳥賊々々」中には「安い〜」と付け加へながら男女交々美しい聲で賣りに来る、茲二三年函館は鳥賊が豊漁なのである。

初めての晩は、耳について眠られなかつた、安眠されぬまゝふと私は恚んな事に想ひ惱された。

生活難に逐はれ營養不良な顔色しても尙ほ且つ窮らない様な風裁を造て居なければならぬ東京生活の女、——赤裸々で暮すことの不可能な都會生活常に虚榮を放して人間を観ることの出来ない浮薄な法規に縛られて居るこの悲惨は、人の罪であらふか、果た社會の罪であらふか？

矛盾が都會であるその如く、都會人は自然の人を自らの手で矛盾に導かんとする愚さに災するものであると知りながら、その苦痛を脱し得ないで煩悶して居るのである、そうして憧憬に慰められて都會生活を僅に誇つて居るのではあるまいか。

實際東京を知らず働いて死ぬ男女は、釋迦の説法を亨くるよりも遙に有難

く迷ひの数が少ないのである。

幸なる者よ、汝の名はエサバ（賣魚人）である。

春秋、果た夏冬を問はず、粗食に甘んじ、粗服に耻す雪の曉にも、酷熱の日にも倦まず弛まず一生一日の如くエサバの途に忠實なるこそ眞に函館を愛護する發達史上の第一人者なのである、即ち富は市の誇である、誇ある處に勤勉の花が爛熳とするのである試みに北海道から東京に居を移して現在幾人その富を維持し居る者あるか？思考するだに愚しい話である。

一足飛の流行

東京でも最近問題に上つて居るが、あの女羽織である、私共が子供の頃には女の夏羽織といふものは、北海道に在つては全く必要のない嫁入着の数の一つであつた。

が新函館では汗だくになつても、着なければならぬ即ち「流行の判天着ねえ者は馬鹿だ」といふ當地に残つて居る小唄の文句その儘に根強い流行となつて毎年新柄が輸入されて呉服店の店頭を飾つて居る。

上野から本線の都會を眺めながら来たが、鐵路四百五十六哩を離れ、更に六十哩の海一つ隔つた函館は、此の長い行程を一躍して、恰も電信のその様な快速を以て、東京の流行を輸入して居るやふな驚異の事實が、婦人を中心に見るゝのである。

尤も此最近人物が東北に移つたと云ふやうな傾向から東北の文化は著しく向上して居るのは事實らしい、否な文化が向上して人物が現はれ初めたのかも知れない、何れにしても比較がとれない迄に新流行を追うて居る、新函館の流行界は、東京のそれを観るに等しい縮圖である、ちうして三越、白木、松坂屋が日本の流行を産みだす様に函館はデパートメントの今井、老舗で通す岩船、デモクラチックな萩野其外の呉服店等が敏速に東京の流行を提供して居るのである。

◇猫背の女に？

流行を追ふ美観念は進んでも修飾されて居る人々から享ける感銘は、甚だ香しくない、即ち嶄新な衣裳を着て居る人々が流行と調和を吹いて居るやう

に見える、悪く評せば石地藏が金紗呂の羽織を引懸けて居るやうな土臭い感がある、何處となく田舎人としての臭味が抜けて居ない。

それは蝦夷型とでも評そうか、獨特な容貌の所有からである、亦化粧の技巧にも原因するであらふが要するに眼が死んで居る、従つて顔としての輪郭が頗る不明瞭である、加ふるに姿勢が悪い、これが軀全體の美を少なからず瑕付けて居る、輸入女でない限り殆ど猫背のやうな俯伏き勝な軀の運は、百〇五日間の降雪日に虐げられるそれに起因するのであるかも知れない、が何れにしても猫背の姿勢は矯正する必要がある、殊に夏の散歩には美を保有する上に於ても必要な緊急條件であると評したい。

◇啄木への挨拶

私がまだ朝日の社に居た頃、校正部で働いて居た筈の石川啄木に十余年を経た今日初対面の挨拶をした。

「君も函館を愛した一人だつたてね」
然し墓碑は沈黙を守つて居る。

東海の小嶋の磯の白砂に、我泣き濡れて蟹と戯る
と碑に刻まれた歌のみが答えた、峨々とした生地を曝して居る函館山の部分
を背後に津軽海峡に面した絶壁の風致は啄木の碑を保存するに最も氣に入つ
た適所である、海に育つた私には、華嚴の瀑壺を俯瞰するやうな凄味は感じ
ないが、然し絶壁の下に開展する、あの深い淵は、見馴れた海岸特有の濃い
水ではあるが、暗い何物かを教ゆる様な魅力が秘められて居る、確に茲處は
夏に活く可き新函館の奇勝地である。

看板廣告に就いて

今から一昔も前の噺ではあるが、淺草橋の交叉點に、化粧煉瓦ですてきに
ハイカラな共同便所が出来た、——その頃何々講さか言ふ團體、今でもある
が、田舎から観光に来る善男善女の部に屬する爺さん媪さんが、電車の窓か
らふと此の共同便所をながめて、何様を祀つて居るかは判らないが、建築が
あまり立派なので、自分ですつかりお堂と極めて、定めし尊い神様か或は佛
様が鎮座して居るに違ひないと、一行誘ひ合つて遙拜したといふ、小勝あた

りの悪口屋が落語にする様な事實談がある。

實際都市の美觀は先づ建築物に據つて旅行者の目に訴へるものである、さ
あれ翔鳳丸とかいふ函館の自慢の數になつて居る、日本一のハイカラな聯絡
船から停車場へ出て観ると、一通り整頓して居る洋建築は、灰色に暗くはあ
るが、兎に角奥床しい函館の文化を語つて居る、茲處から辨天方面に進む十
字街から先のアスハルト道路は、周圍の建築と調和がとれて、確に大都市と
しての面目が躍如たるものである、然し是が個人宛六千圓の損失を蒙つた大
正十年大火後の都市修飾であるかと思ひば轉た同情の感に堪へない。

更に停車場から大門に進むか、此街があゝの末廣町に連絡を保つ新函館の市
街かと怪まるゝ程に俗悪である、あの滿州地方で見る支那人街に来た様な不
快を感じるのである。

其最も目障なのは、洋建築そのものに、ベタリと西洋御料理生蕎麥などゝ
筆太に書き付けて居るその不體裁である、どう善意に解釋しても十八世紀趣
味の境を脱し得ない低級どしか評せざるを得ない、不體裁な家屋に不體裁な

廣告看板はその都市の幼稚を語るものとしてさほど目障りになるものではないが、少なくとも現在のやうな歐米式建築に在つて、一世紀もむかしに應用された様な廣告術を弄するのは、新函館としての耻辱である。

桑港の建物に於ける看板の高さは三呎、地上に建てる處のものは、十呎と制限して居る位である、これ都市はその美觀を損せざる範圍に於て廣告をするといふことを市民として考へねばならぬ廣告應用法の原則なのである、亦廣告の改善に努力しなければならぬ所以なのである。

白耳義のブラッセル市は此點に於て好模範を世界の都市に示して居る、市民は多く看板を美術的にすることを研究して居る、これはナカ／＼費用を要する問題ではあるが、努力の如何に據つては、人々の注意を惹くことまた甚大なものであるから、結局廣告としての目的即ち効果が擧ることになるのである。

新函館市民は、頗る廣告術に遅れて居る、市中を見物して唯の一つも新しい試みの現はれた看板廣告を見出すことは出来ない、此の一事實から推して

小賣商人は能率の擧らない營業をして居るといふことを證據立るものである

◇ 二度と行くまへ辰己の里へ

生物學上から觀て現世紀に棲息すべからざる山椒魚が、箱根の山邊りに殘存して、山椒魚餅とか飴とかになつて賣擴められて居るといふ日本だから公娼の存在して居るのは當然の話である、焼かれても焼かれても根の絶へない函館遊廓は、辰己の里など柄にもない深川ツ子の看板を懸けて、大森濱に巢を造つて居る

元來日本の當局は此種の營業に對して保護政策を採つて居るのか果た漸減主義を期待して居るのか、その何れかは知らないが、函館警察署は少なくとも遊廓撫育に努めつゝあるものゝやうに思考される
見よ警察署に於て公許したる物價表を

	公許定價	市内小賣値	
サイ	五十錢	十八錢	美人印
イ	五十錢		
タ			
酒	五十錢	二十錢	水臭イモノ

ビール 一圓 四十錢
肴 一圓八十錢 二十錢
サツボロ
バナ、五本

何を基準としてかゝる物價表を編み出したものか頗る解釋に苦しむ疑問の點なのである。

暴利取締令は確か日本の法律にもあつた様に記憶する、震災當時盛に東京新聞に散見した初號題目であつた

それとも函館遊廓は特に蝦夷地であるから除外例を以てすといふ特典があるのかも知れない或は前記の飲食料品は令外の品々であるかも知れない。

さあれ此種の營業者間に用ひらるゝ常套手段の押賣、即ちボルことに於て恐らく函館遊廓はその著名なる代表者であらふ。

故にこうした問題が、殆んど毎夜七件乃至十件位は大門側の派出所に持ち込まれるといふに至つて、如何に悪辣であるかが判断できるのである、かくて一般の要求は簡易にして安直な密淫賣を漁るといふ事になる、需要があるから供給者が現はれるといふことに歸着する、大勢には逆し難い道理である

兎に角遊廓氣分を味はんとするも函館遊廓では求め得られない無理な注文なのである。

加ふるに花柳病患者は大正十二年度に六百三十名を出し、甚だ香しからざる成績である、今や極度の不況を喰らつて正に自滅せんとするに等しい悲境に呻吟して居るのである、一流處は別として二、三流者に對しては此機を逸せず所謂開港地根生に災する悪慣習を改善せしむるか、さもなくんば亡滅せしめてこそ新函館市民の誇となるのである、旅行者の等しく不快を訴へる隔離地たることを更に新旅行者に警告せざるを得ない。

洋装と紅禪の保存

浦潮に居る頃、重税題問の事から遂ひ筆が這つて、赤軍を日本婦人の朱い禪に譬へ、白軍を白蛾に擬して、白蛾は紅い禪の生地は喰ひ破り得ても、紅禪を白に染めるといふとは不可能な努力の滑稽である、と與太を飛ばして忽ち筆禍を招引した、以來紅禪といふ文字に遠ざかつて居たが、今度どうしても使用せなければならなくなつた

函館に来て、茲地の女兒が想つたよりも洋服を着用して居ることの多いのは案外であつた、古い創業の歴史を以て婦人小供洋服の製造販賣をして居る本郷真砂町の大河内洋服店が永年金をかけて宣傳に努めて居たものだが、その東京ですら、震災後漸く普及的になつた洋装を、新函館は既に早く利用して居たものらしい、逢ふ子供の何れもが洋装して下駄を履いて遊んで居る、恚うした和洋折衷は流行を外に市民の經濟觀を雄辨に語つて居るのである。

恚うした傾向から和服になつても猿股を離さないといふ習慣が植付けられた、従つて在來用ひられた紅褌が不必要といふことになつた、誠に結構な文化の向上である、函館の様に夏期でも可成猛烈な風の吹き荒む處でも此較的無關心な子供達は、風の吹き捲くる儘に委して遊歩する、その體裁の見苦しさは獨、外人に許り直感さるゝのではなかつたのだ、然るに洋装迎合の結果その不體裁が驅逐さるゝに至つたのである

是たしかに、社會政策の立場から觀て新函館は風教上に一新紀元を劃したものであるといふも過言ではない。

然し赤は墮落の表示的色彩ではあるが、亦活動を意味する刺戟の色であることを想うて、家庭に在つての主婦自身は、常に「亭主の好きな赤烏帽子」といふ警句を參酌して三十は愚か四十になるとも家庭圓滿の和合色として保存する必要のあることを忘れてはならない。

◇ 家庭教育の挿話

男の兒は腕白で、女の兒のた轉婆なのが、眞直に育つ兒童の本性なのである、それを親が右に揉め左に曲げして伸び得なくせしめて行儀の好い兒とか温順しい兒とかいふて、それを一種の自慢にして居る、茲迄に親も愚直になれば、この親を矯正するに可成り骨が居れる、恚うした兒、斯うした親は不幸にして都會に多い。

然るに私の知つて居る友人の家庭に恚ういふ話がある、或時三男が父親と一緒に外出すると眼新しく高價な正札のついたゴム輪の三輪車が入つた早速く父に向つて買うて呉れと強請つた、父親は二つ返事でよしと即答を與へた、そうしてお前達の買物は、全部母さんがやつて居るのだから、歸えつ

たら母さんにね願ひしなさいと附け加へた、子供は歸宅して母に三輪車の自轉車を買つて呉れるやうに話すと、咄嗟にその母親はウンと呻吟しながら子供の名を呼んでコップに水を運ばした、そうして一口飲んで横さまに寝た、子供は何が何んだか判らず、寝るべつて居る母の背中を擦つたり、容體を尋ねたりした、その時母親は子供に向つて

母さんはあの三輪車といふことを聞くに苦しくなるのだと話して聞かせた、以來その兒は父に對しても三輪車を買つて呉れといふ駄々をこねなくなつたそのことである、その後椰揄半分に隣人が三男に向つて三輪車はどうしたかと尋ねたら、眞剣になつて三輪車といふとは話さないで呉れ、母さんが病氣になるからと語つたさうである、私はこの話を聞いて、母親の頓智も秀逸ではあるが何んの濁りもなく育つて居る子供の持つ氣分に對して敬虔の情轉た禁せずには居られなかつた、この從順があつてこそ、始めて素直に育つ無邪氣が伴ふのである。

こうした挿話の中からも新函館の家庭教育と人情美を窺ふことが出来るのである。

夜市と縁日の對照

蛇の生活の様な、半歳より活動の出来ない函館の市日商人には、惠まるゝ夏期ほど活甲斐のある生活はないのであらふ。

さあれ函館の市日は東京の縁日に見るうれの様に活氣満々たるものであるらうして露店の建ち揃つた數の多いことに於ては人形町（水天宮）の比ではない、この夜市は確に新函館の名物の一つである。

組織は、何日は何町といふ風に、恰度東京人が縁日を追うやうに好奇を唆る、従つて一家集つての睦しい漫步が市の街を埋めて居る。

ふと此の夜市の露店を眺めて私は、東京人と、函館人との對照を考へずには居られなかつた、それは外でもない、東京の縁日には必ず飲食屋臺が附随するとに極つて居る、譬へば、縮屋、天麩羅屋、おでん屋、一品洋食屋、果ては牛めし屋といふやうな腹に應への來る食物を商ふ屋臺が數々出る。

そうして、其處には階級の別なく立ち並んでバクツイテ居るのが縁日の情景である、然るに函館の市日にはこうした屋臺露店は殆んど見當らない、そ

れは恐らく出ないのではなく、經營しても營業にならないから出さないの
ると考へられる、詰り立食する人が無いといふことを意味するのである。
茲に於て此の對照から忌憚なき兩者の異なる氣質が窺ひ知られて面白い。

◆ 新意味の自慢一つ

藤村市議を訪問したら、函館新名物として是非第一火防線通りを觀て貰ひ
たい、北海道でも稀に見る美觀であると云はれた。

從來日本人にはた國自慢といふことはあるがまだ都市に就て誇るといふ考
へがない、私は常にろう思ふ、日本人も泰西人の様に都市を誇るやうになら
なければ文明人としての資格が具はらないのである、と信じて居た、此の意
味から評して私は藤村さんを函館の新人と呼びたい。

いふ迄もなく都市は自治体で其盛衰興亡は一に市民の努力如何に因るもの
であるから國を誇る以上に都市を誇ることが可能なのである、且つ國家に盡
すといふことよりも都市の爲めに盡瘁するといふ事は一會直接であるから愛
都心を喚起する様に勸告することが必要なのである。

善く人は言ふ、何處何處は住心地の好い土地だ、とそれは何を意味した言
葉であらうか、常に私はこんな考へを都市に對して持つて居る。

都市生活といふものは家庭生活の擴大された共和生存の状態なのである、
詰り人生の幸福を目的に生活が營まるるものであると信ずるのである、ろう
して比較的欠陥の少ない幸福のより多い都市が即ち住心地の好い土地といふ
ことに歸着するのであると考へられる。

茲に於て家庭生活にしても、果た都市生活にしても其必要條件として考へ
ねばならないのは、便利、衛生、修飾といふ様な問題が第一に起つて來るの
である、こうした問題が解決されて居る都市は必ず佳心地の好い土地となつ
て人口稠密諸業繁榮して居るのである。

さあれ、新函館名勝とでも評すべき火防線通りは五十万圓餘を投じて完成
したものである、此には市として三分の一、内務省から三分の一、残りの三
分の一は直接建築者の負擔といふ頗る隱當な分擔で一町内全部鐵筋コンクリ
ート乃至は石造、煉瓦造といふ不燃物を以てし一個の物置たりとも木造を許

可しなかつたのであつた。

かくて完成を見た市美は、建築にも亦その整頓にも果た都市生活の立場より評するも模範を示すに足るべき函館新名物の權威となつたのである。誰か函館に杖曳くもの、郷里への土産として見落すべからざる函館新自慢の一つたることを紹介して置く。

市議尊名と選挙

都市の活動の泉源は言ふまでもなく市の議決機關と執行機關である、此衡に當る處の市會議員三十六名即ち

佐々木文治	小川彌四郎	四ッ柳龜太郎	服部豊治郎	梅崎	幸治
黒住 成章	齋藤 修平	宮本 菊二	渡邊増太郎	濱崎	治助
山崎松次郎	小森良三郎	中村諭二郎	宮澤 嘉貞	小態新三郎	
堤 清六	平出喜三郎	岩清水恭次郎	岡田 健藏	泉 泰三	
村木喜三郎	太刀川善吉	坂本壽太郎	恩賀徳之助	外山 平治	
登坂 良作	菅村 純之	齋藤榮三郎	藤村 篤治	松下 熊槌	

九〇

九一

石井 隆 伊豫田徳次郎 前田卯之助 鷹田元次郎 進藤榮太郎

(一名缺員)

更に色別けにして見ると、公正會即ち憲政派の十三名、北門會の政友會派九名、中立派の十名、無所屬の四名といふ對立になつて居る

元來自治政体の精神から見て議員の中央政黨に氣脈を通じて居るといふことは過罪である、否な墮落である、何んとなればこうした腐れ縁から種々な枝葉關係が生じて、時に英斷も政黨關係から市に忠ならんと欲するも之が爲め鈍る様な運命に遭逢することとなる、是確に自治精神に反する處の即ち市政を弄するてふ非難の理由となるのである、更に政黨關係濃厚なる時は議員の品質を下落するに到るのである、現在の函館市會議員の價値は決して向上した一粒撰の選良とは評されまい、何んなればこの選挙に於て不合理があるからである。

それは市民の選挙に對する智識の深淺にもより、亦道德觀念の濃薄にも原因することでもあらふが要するに都市の幸福を没却して自己の利慾に溺るゝ

といふやうな恨があるのでは無からふか——其處に低下された議員が現出することになるのである、英國では市議員の選舉費用に制限を設けて居る、即ち有権者五百人以下の場合には二百五十圓を以て最高額とし有権者一人を増す毎に十二錢を増加し得ることを規定して居る、函館市會議員の選舉費は平均四五千圓と目されて居るに於てたや、ろうして選舉法に背く者は総て選舉權を剝脱せらるゝことになつて居る。

此を以て見ても奈何に價值ある人物が市會に送らるゝかといふことが首肯さるゝであらふ、更に普國に至つては市の機決機關として世界に其範を示して居る、即ち政黨政治の爲めに度々其位地に變動を來たす様な恐れがないといふこの一事は確に新函館として學ぶべき市民將來の福祉の鍵であると思ふ

皮肉な火事親父

羅馬のネロ帝が市區改正を想ひ立つて全市に火を放つたといふことは善い意味か悪い意味かは別問題として有名な話である、さあれ日本には古くから地震雷火事親父といふ俚諺がある通り、天災の内で火事は最も佞惡な奴であ

る、處が此の火災は人智人力で最も容易に防止が出来といふのも皮肉な話である、消防本署を訪ぬると二郡長の今井さんが嬉んで迎え、呉れた、この人自ら訪問した經驗ある仁らしい、消防の立場と其職務に就いて立派な意見を有つて居て心強い感を與へる、話を聽いて觀るとなる程失火すれば函館は大火になる解だ、一年を通じて二百五十有余日が暴風に屬する風速である、詰り地形が火事を育ぐむやうになつて居る、それに從來の建築は殆んど誘火燃物の木造ばかりであつたからだ、この二つの理由だけでも大火の素質が明瞭である、加ふるに消防設備の不完全、水利の不便といふやうな事まで手傳つて大火を餘儀なくさせた、そうして大火に次ぐに大火を以てし、平均焼失戸數一日一戸三分、この損害一日一万一千〇五十四圓六十錢、一人當損害二十七圓といふに致つて市民は始めて消防に對する自覺を感ずるに致つた、この機會を逸さず當事者は防火宣傳に全力を注いだ、こうして完成したのが現在の消防設備である、これ即ち舉市一致の美德で新函館の誇であるのだ。

震災一寸前まで東京でもまだ試験中といふ札を懸けて居た火災報知機が函

館は既に實用化して居るのである、文化の程度輸入流行品以上に進んで居ると評さざるを得ない。

書記の高山さんが報知機受信状態を實驗しながら懇切に説明してくれた、今更ながら精工な機械の齎す幸福の威大なるに感謝せざるを得なかつた、さりながら市民は常に、「百の唧筒よりも一つの火元」といふ様な細心の注意を拂つて居れば、將來函館に火事を観ることのなくなる即ち住心地の好い都市の範を残すに到るのである、然し火元の統計は逐次、東に進むそであるそれは函館の延びんとする方向なのである、ネロ帝の思惑から言ひば或は理想であるかも知らぬが、地形は危険を伴ふて居る、住む者も、新しく建築する者も、また市當局も十五萬市民の共同生活の爲め多少の犠牲を拂ふことを吝まざるやう進言する。

龍紋氷の由來

豫てから氷採りの光景は頗る雄壯なものであると聞いては居たが、百聞一見に如かすてふた定り文句に背いてゐる、日本での天然氷としての權威は函

館氷である、即ち俗に言ふ龍紋氷それなのである。

明治三年三河の住人で中川嘉兵衛なる人始めて五稜郭の濠で採取したのに起源を發して居る現在では山田敬助といふ函館ッ兒が經營してゐるが、明治末期頃まで東京は申に及ばず、遠く四國、九州邊まで輸送して、氷は龍紋と名聲を博すに到つた。

函館氷がどうして龍紋氷と謠はるゝやうになつたかといふに、去る日の内國博覽會に出品して褒狀を享けた、處がその褒狀に龍の紋模様がついてゐたゝりここで龍は水を離れて活きない、且つ龍は淨瀑を背景に存在するものゝ如く膾炙されてゐる處から龍の住む様な清冽な水で造らるゝといふ宣傳を意味して龍紋と命名するに至つたのである。

近年各都市は競つて人造氷を製出するので販路漸く狭ばまり一時二万五千噸の製産高を誇つた龍紋氷も近年では昔の面影を失なつた、然し未だに年産二千五百噸は下らないといふ。

函館の人に氷の批評をさせると、東京の氷は甚だ不味いといふ、どうして

も氷は函館でなければ眞實の味が出てゐない力と説する、或はそうかも知れない、然し不幸にして私は虫歯に災されて完全に氷の試食が出来ないことを残念に思ふのである。

冥福する五稜郭

品川沖のお台場——と聞いただけでも今日ではなんだか滑稽な淡い嘲笑の響がする、況んや築城法の幼稚なるのお台場なるを観るに及んで——りれ程に世の中は進んで居る。

然しその廢物が利用されて、品川沖埋立にはた眺向きの足溜となるに到つては、お台場なるものも冥福たらん。

御多聞に洩れず、五稜郭もそのむかしは北鎮唯一の要塞ではあつたが現今では函館十五万市民の公園となるに及んで、工費四十萬兩と九ヶ年の長日月を要したといふその犠牲的努力は、夏の恵みに逢ふやうに甦つた解なのである。

さあれ一度壘上に佇立するか、四方の景色それ豁達且つ雄大郡部の高原宛

然手に採るやうな瞻望である、また脚下には湛水洋々として山水の極致を畫く、之れ即ち五稜郭公園の生命なのである、濠水は暗渠を設けて遠く亀田川から透引して居る、今日の土木學から評すれば或は平凡な工事であるかも知らぬが安政年間の土木智識としては確にダム式水倉を見るやうに最新式なものであつたのだ。

更に老松轟々と蒼空を蔽ひ幽寂畫尙寒しの感を抱かしむる郭内面積は實に五万四千二百二十坪、是を包繞する土壘の高さ一丈五尺、更に壘下には水深一丈八尺を以てする濠面積一万五千七百五十五坪ありと謂ふに到つては確に現共に代離れのした雄物である。

壘上には皇室に對する記念樹、亦函毎新聞の一万號記念の櫻樹など、年と五稜郭の價値をして後世に傳ふるに至るであらふ。

五稜郭の劇人形

五稜郭公園内の参考館は、佐幕の殘黨を以て任じて居る片上樂天の老後の

社會奉仕的經營である。

泉覺寺の義士人形も見る迄は好奇心を唆つて觀覽料五錢か二錢かを拂つて觀て始めて其徒勞たるを知る、然し義士の墓碑を保存して居る舊蹟に詣ふでて、義士人形ありと聽けば、誰しも拜觀したくなる、何營業にも政策のあり世の中だ。

殊に五稜城を取拂つた松並木ばかりの廓内に這入つて、榎本の飲用した井戸のみ淋しく残つて居るといふ自然を見た許りでは頗る物足りない感を起す茲に於て参考館はよし空虚な遺物であるとしても、此場合參觀者に對して、麥湯に等しい接待の存在である。

人形の配列は開陽艦長室の激論の場から始つて全八場ある、樂天老の嗜好と見え、到る處に文字を書きつらねて説明に代へて居る、其中で第四場の千代ヶ岱陣屋中島兄弟永別の盃といふ一幕は殺伐極まる光景中の紅一點とも評すべき婦人を應用した場面である。

◇

兄「天なる哉命なる哉、我軍の兵勢日に非なれば父上には明日を最後と定

め給ひしと覺えたり、吾等とていかで後れを取るべき華々敷一戦を試み父上の御供せんと思ふが如何に弟？」

弟「仰の通り不肖とて何に小女々々と生を惜み申すべき潔く御供申さん」

兄「いみじく申す者哉、然れば永別の一献酌ふぞ」

弟「有り難く戴き申さん、イザ兄上より御始めあれ」

腰元あやめ「惜しや未來の名將たるべき若様御二方——大殿様の御供と御覺悟、お留め申さん便もなし、此上はお國に御座る御三男様をお守り立申上げ、天晴名將と成らせ給はん事を御祈り申さん」

首將中島「花に比すれば末だ咲き初めぬ蕾の若者、むざ／＼死なすも武門の習ひ、是非もなし噫爲まじき者は宮仕へなる哉」

と、臺詞がつけてある。

芝居心のない私が觀ても、此の一場は函館戦争のヤマである、恰度上野戦争に出る三河島の金魚屋内に等しい殺風景な戦争劇での色模様である、さし詰め壽美藏、薙升、松蔦等の染め出す友禪模様なのであらふなぞと、深い理由もなく考へられた。

尊い一錢圖書館

函館に二つよりない圖書館、一を函館圖書館と稱し、他を彰善館と謂ふ、
その内で一番多く書籍を納むる函館圖書館、和漢書、二六、七九七冊、洋書
一、二六一冊、合計二八、〇五八冊、函館公園内に在つて周圍の趣はあの上野
の帝國圖書館に似て居る。

頗る感じの善い讀書室だが、比較的慌しい生活を營んで居る市民の多くは
世俗を忘れて一日の讀書する暇もないと觀え頗る閑散である、然し近頃のや
うに滿員札止で二三時間位待たさるゝ上野の圖書館に比ぶれば此の閑散は寧
ろ幸福なやうな氣持がする。

紅茶俱樂部が此の圖書館に立籠つて、函館叢書の刊行に努めて居ること
は、函館啓發の先驅者として新函館に盡すこと亦甚大なるものであらふ。

入場者一ヶ年の延人員九万一千八百名前後であるから平均三十名位あるが
大半は學生である、従つて文學に關する書籍が比較的多く讀まれて居る。

最後に入場料金一錢也は深く記憶に残る尊い數字である。

驛員は立關番であるのである

日本一のハイカラな船を所有し、仙石さんといふ名鐵相を戴く今日の函館
驛、而かも本道の最要關門たる始發驛。

この驛の鐵進案内所は一面硝子張りで然かも大戸を下ろした酒屋の窓口の
様な硝子一枚の窓口で一段と下つた事務所？其處に椅子を据わせた係員、客を
見上げて應對して居る、しかも偉ら相な態度で、返答を再聽するか直ぐ面相
を變へて粗野な挨拶に變る、函館驛員の無修養、不訓練は諦らめの好い新函
館人には感應刺戟しないかも知らないが、旅から來た者には直感的に、時代
錯誤の官尊民卑といふやうな遺物の不快を與へる、再問さるゝことが鐵道省
員として不名譽であるものならば、明瞭に純日本語で、徹底する様な位置で
應答するのが本來である、客が窓口に頭を差し込まなければ聽き取れないや
うな設備をしながら、客を愚かしいものにしての取扱方は甚だ遺憾である函

館の爲め啓蒙の實を擧げて貰ひたい、近く驛も新築さるゝそうだから、その時は先づ鐵道案内に重き注意を拂ふことにして頂きたい、是新函館は本道各地に到る道標のそれに等しい責任ある玄關を預つて居ることであるから。

◇ 權威ある電車教育

水電會社の電車車掌は地方としては珍らしい程訓練されて居る、東京市の車掌の様に規則一點張りて客をへコマスやうな事のない其處に民營車掌の特長が絢爛と光を放つて居る、それに茲處の電車では乗降難といふあの苦痛と憎惡が伴はない、頗る乗心地が好い、それはあの市電の車掌の様に、募集した標語をクドクと囀らないといふことも一つである、亦車掌といふ職務の理解にも據るものらしい、従つて乗降客は車掌に手を煩はさない、その乗降に就て觀ても、降客の終る迄乗らずに待つて居る、此の美風は東京から來て第一に刻まるゝ好印象の一つである。

尤も之れには理由がある、豊富な車臺が常に潤澤に運轉して居るから降客

の終るのを待つて居ても決して置き去りになる様な怖がないといふ大安心が保證されて居るからである、従つて自他の不便となる様な行動はとらない、故に、勞働者でも電車に乗る時だけは、立派に紳士としての態度が保てるのである、之を想ふと東京での電車道德の破壊は罪直接當事者に在りといふ事が明瞭に判つて來るのである、徒に市民の公德心に向つてのみ反省を促すといふ事は愚直の戯事である。

茲に於て住心地の好い都市としての條件である便利といふ問題を新函館は既に解決つて居るのであつた。

◇ わすれられない競馬

まだ日本に競馬法の復活を見ない頃でも浦潮には毎日曜日に競技は開かれた、その頃は浦市競馬場は經營難に襲はれて居たのでチエツクスロワーク軍が借受けて直接經營の任に當つて居た、入場料は五拾錢と壹圓の二様であつたが、日貨に換算すると頗る安直なものであつた。

世界でも馬の産地——否な此方面の智識と訓練の權威として全世界に鳴り響かしたコザツクが存在して、馬の嘶が話題に上る毎、老露西亞は紹介されると同様北海道に於ける馬質の改良問題に伴ふて函館を出す様にしたい、とはウマい洒落からではない。

彼地は馬券の購賣に就て内地で見ると様な小五月蠅いものではなかつた、尤も當時は無警察同様であつたので、場内では米相場に伴ふ合百に等しい賭事が観集の間に公然行はれて居た、目黒の競馬は何時も機会を失するので今度ころは一番函館で運試をやらうと計畫して居たら相棒浪花次郎慶から、損しても儲けても精神上に及ばず影響は創作に波及して面白くないから廢せと注告を享けて今度もお流れとなつた。

然し新聞で穴を買つたテキ屋が二百圓の割戻をせしめたといふ記事を讀んだ時は確に残念なことをしたと想つた。

何時が浦市で七頭建の雄壯な競技の際、私は馬の良否を度外視して、唯一人より出ないチエツク兵の六番を買つた、此騎士は近々歸還する凱旋兵だと聞

いたので、ことによると八百長して彼に花を持たすのじやないかと、咄嗟に鋭敏な神經に感應した、豈計らんや此觀測は正に的中して六番は全身を抜いて先着となつた、その時の配當勿驚二百九十六圓であつた。

さあれ函館競馬場は湯の川村字柏野に在る、函館競馬倶楽部の經營で場内面積八百八十間、毎年春秋の二回に競馬を行ふこととなつて居る、そして大正十一年秋季から皇室賞典を下賜せらるゝに至つた。

運動場と野球熱

競馬場に續いで大運動場がある、総面積九千一百七十八坪といふ殆んど理想的に完全なものである、函館水電會社の經營になるもので、其關係でもあらうか、運動場の入口まで引込線を敷設して居る、であるから驟雨が來ても觀集はぬれずに函館市中まで傘なしで運ばれるといふ事になつて居る。

市民の多くは非常に運動好きであるらしい、そうして一般に尙武の熱が熾烈である、恰度私の參觀した時は大毎、太洋の試合であつたが金一圓といふ

入場料を拂つて場内を埋むるもの無慮五千と算せられて居た、以つて熱中の程度が想像さるゝことであらふ、況んや斯界に關する智識の深いことは論を待たない、私の下宿して居る温泉にも函商の野球選手が殆んど一ヶ月近く泊して練習に努めて居る。此外に市内谷地頭に體育會の經營になる運動場もある。

郵便貯金から觀た市民の富

今日の貯金は明日の何んとか、恒産ある者に何んとやらといふ標語入の宣傳ポスターを惜氣もなく配布して、逓信省は盛んに貯蓄心の啓發に努めたものであつた、その結果一時は何十億とかいふ一寸暗記の出來ない様な膨大な數字を現出した。

が部分的として見る、函館の郵便貯金は一の一等局と十一の三等局を合し口數にして十六万〇八百八十口、此の金額二百四十八万九百六十九圓といふ預入高である、そうして拂戻高二百四十四万八千八百八十六圓、この口數六万四千

八百四十六口、差引金額に於て八万〇〇八十三圓の残高となつたのである。今是を大正十二年度未現在の三万四千五百五十六戸に割當てるご一戸平均二圓三十錢強となら、更に總人口十五万二千三百八十三人に分當すれば一人當平均五十二錢強といふことになる。こうして見ると年俸一万圓取る市長さんも、右や左の旦那様と物乞ひする路傍の乞食も函館市民として郵便貯金に現はれた富は僅に金五十二錢強といふ手拭地の浴衣一枚買うことの出來ない哀れさなのである。

函館に育つ俳優が欲しい

現代では内務、文部の各大臣が活動寫真や浪花節、演劇などを社會政策の手段に利用し、小學校また童劇、舞踊をその教材に求むるなど實に眩狂るしい程な變り方である、私達の小學校時代、今から三十年位前までは、教師から觀劇を禁せられたものであつた、然し私も相棒の浪花次良慶も禁制を破つて觀に行つた、それ程に劇を理解する天性が具はつて居た。

今日から考へると禁制を發布した教師の腦よりも子供ではあつたが自分達の方は或意味に於て進歩して居たのであつたことを知る。

さあれ函館の娛樂機關はその興業物から觀て食傷する程に盛上つて居る。劇場、活動常設館、無慮十八館といふに至つて如何に豊富であるかといふことが窺はる。

劇場に關係ある俳優は全部旅興行のそれを迎ゆるので、劇場に基礎を置いて居る俳優はないのである、従つて觀客は常に好奇を以つて廣告宣傳に吊られて居るのである、憊うした關係から、淺草に居る訥子が現はれて見たり、演伎座に開演中の新國劇が〇〇座で開場して居たりするといふ滑稽が演出さるゝのである。此等は興行師そのものゝ悪いのは勿論だが、亦俳優その者も自ら演劇の尊嚴を疵付ける、即ち娛樂政策の防害者なのである。

こうした惡どい營業政策は興業師も俳優も今日の時代では避けなければならぬ迄に觀客の眼は前二者を凌いで居るのである。

實力のない三升がよし十代目團十郎を襲名した處で日本の觀客は先代同様

に決して觀賞しない、それと同じ様に腕のない馬の脚が、千両役者の看板を掲げて、無免許醫師のそれ程に好果の擧がるものではない。

茲に於て劇場經營者は、劇場に基礎を置く俳優の養成に着手しなければならぬのである、旅から旅へと流浪して歩く一行を迎ふるといふことも時には政策上好いこともあらふか、十五万餘を抱擁する函館あたりでは、少なくとも名題の二三枚を加えた函館を根據とする俳優團の一つ位は組織する必要があると思ふ。

東京と大阪に聯絡を持つ菊五郎一行のやうに、函館小樽、乃至は札幌といふ様に興業師が理解をつけて興行する上に於ては決して損の行くやうな事業ではないと思ふ、そうして永い月日の内には觀客と俳優との意氣が融合して根強い最負がそこに育つこととなるのである。

藝術家と町廻り

私が或るビルディングの三階に居ると、何處からともなくお祭の馬鹿囃が聞

こいた、末廣町の眞只中でお祭禮でもあるまいとKに尋ねると、あれや梅坊主の町廻りだと教へて呉れた、聽て来る屋臺の後には、蝦夷地とは言ひながら直射する最夏の陽光を扇子で厭ひながら人力車に乗つて一行十何名かが緩々と遣つて來た。

周囲の洋館からワイシャツの人や、女や子供達が、何か囁きながら戸外へ出で一行を見物して居る——伸んびりとした情景だ。何處で拾ひ集めたか豊年齊梅坊主、とにかく耻しからぬ勢揃ひだ、最後の使に奴さんが座長格で納まつてあの蛸の様な目をキョロつかせながらバラック東京では觀られない様な洋建築を見物して居る、恚うなつちや深川つ兒も赤毛布だ。

さりながら旅へ出るところした土地の習慣に脅威されて町廻りといふ東京で知らない苦業をするといふ事は確に藝人の耻辱であり、亦忍び得ない苦痛なのであらふ。

日本否な函館の觀客は藝術家に對する獨乙人のその如く——あの大學生が教授の講義を聽くやうな眞剣な態度になるのは何時の頃であらふか。

映畫と人氣女優

映畫の發達は明治文化のそれを觀る様に短日月に津々浦々まで普及された別けて函館の映畫界は頗る發展した、活動常設館として九館外に準常設館六館を有つに到つては如何に此種の信者の多きかが窺え知られる。

函館は五つの中等學校を有つ關係上學生に據つて映畫の選擇がされて居るやうである、即ち呼物になる映畫は新派物の人情活劇といふ様なものが觀客を嬉ばして居る、洋劇に對しては餘り趣味がない、舊劇は家庭の人々に歡迎されて居るが、元來映畫で舊劇を觀る程詰らないものはない、唯た筋が徹底的に腦に這入るといふに過ぎない、大刀を抜いたそこに何等の表情も現はれない、然し四谷怪談とか白狐物語とかいふ神出鬼没、乃至は幽霊とかいふものの出現には舞臺で觀られない學術應用の秀いでた點が發見さるゝばかりである、新人級に屬する學生達の眼は慥に進んで居る、學生達に言はすると活動俳優では何んといふても女優の水谷八重子が一番人氣がある様だ、次いで梅

村容子、柳咲子などで栗島や、川田は一向函館に人氣がない、處變れば最負も變るものらしい、先年朝鮮へ行つた時、釜山で活動寫眞の調査をした時には、栗嶋が獨舞臺といひたい様な人氣であつた。

函館での人氣男優は勝見庸太郎が首席で岩田が之に次いで居る、そうして淺草の羽左衛門といふ人氣を取つた諸口などは問題にされて居ない。

茲地の興行は一週間の差換であるが、常設館の多い割合に相當に客を呼んで居る、此最近人氣を拍した映畫としては「人世の愛」であつたといふことである。

離婚數沫消の秘訣

西伯利亞には、港別れ夫婦と停車場別れ夫婦といふのがあつた、あの方面に關係の多い函館人の仲には此の言葉の意味を理解して居る人もあらふ、亦直接に行つた經驗のある人もあつたかも知れない。

實際殖民地で出来る夫婦といふものは頗る簡單で頗る徹底して居る、それは

一一三

一一三

また當然なので、男も女も夫婦愛といふ神秘的な真隨に觸れ得ないで、物質と性慾の二つより考へて居ない、男は金で女を買ふ、女は買はれた以上金の爲めに男に従つて居る、人情、風習の異なる郷里を隔つ關係上情慾を離れて他に融和する手段が求められないのである。そうして男と別ればまた醜業婦になるまでだといふやうな諦めがあつたりと付いて居る、男が執着でない限り女から苦情は出ない、其處に港別れ、停車場別れが簡易に實現さるゝのである、偶々男の後を追ふ女もあるがそれは全くの除外例である、然し同じ殖民地でも北海道はるの基礎に於て彼と同一視は出来ない、何んとなれば西伯利亞には娘といふものは殆んどない、女といふ女は人の妻を除いた全部が醜業婦なのである。

さあれ函館の結婚状態を見るに大正十二年度に本籍を有する者で婚姻した數は、一千五百五名で離婚したものが百七十六名約一割強といふ比例である、また寄留者として婚姻した者が二百五十名、内離婚者が二十三名となつて居る、之れは一割弱である、出産率は本籍者四千三百十四名、寄留者一千七

百九十四名である。

昔から出雲の神様の手に縛られて居るのが夫婦で、人測の許さない神秘的なものが即ち夫婦離合の機会となるのであるとされて居る、科學の進歩した現代ではあるが、何んとも人工技を用ひられず滑稽視しなから神の心に任して居る。

然し世間で能く言ふ、あんな綺麗な旦那さんが、ごこが好くつてあの醜い奥さんを可愛がるのだらふ？と疑問を抱く人がある、亦その反對にどうしてあんな優しいらうして別嬪な奥さんを嫌ふのかしらと不審を持つこともあるそれは實際に此の問題に觸れた男、乃至は女でなければ解し得ない不幸な告白を待たなければ會得できない難解釋なのである。

本能の力といふものは量り得られない程に強いものである、世間並の修養とか、道徳とか、信仰とかいふやうなもので夫婦間に胚胎する煩悶、乃至は葛藤を解決つけ様とするのは、情慾愛を知らない無益な努力であるのだ、根本的誤謬なのである、性的悲劇の救済は矢張り性を以つて解決せなければ徹底しないのである。

私は教ゆる、悲劇を産む以前に於て、即ち密月の新夫婦時代に、性的に男は妻に甘へ、女は夫に甘へるにあるのだ、そうして享けた印象は妻を離し得ず亦夫を離し難ないといふことになるのである、此れ離婚數字を抹消する秘訣なのである。

トラピチヌ生活を訪ねて

キリスト教信者に言はしむれば、童貞を守り得たそこにキリストの偉人たる聖人の光があると言ふ、然し吾々平凡人から觀れば、造化の神に背いて女を知らなかつたといふそれが物足りない、女の悩みは男である如く、男の悩みは女である、女に對する男の悩みは女に觸れたものでなければ判らない、第三者としての立場からでは眞の同情が出ない、従つて救ふ途に無理が伴ふ筈である、救世主としてのキリストに對するそれが不満である。

さあれ湯川の天使園に於けるトラピチヌの生活を窺知したいと思ふのは私ばかりではなからふ、秘密にすればするほど見聞したいのは人情の淡い反抗

心だ、御多分に洩れず、夏の陽光も厭はず私は訪問した、名刺を通じて院主か留守居か佛人らしい日語の解る爺さんに逢つた、此爺さん多く語ることを避けた、ろうしてトラビチヌの生活といふ印刷物を一枚呉れて簡単に答へて別れを告げた、内部の観覧さるゝことを厭ふたからなのであらふ。

受附の隣の部屋に、此夏中修養する爲めに修道院へ來たといふ仙台のカトリック教の學生が居た、物足りないので罪なことは想ひながら生臭男の私はこの女學生を捕ひて試問を連發した、此の途の教育を享けただけあつて信仰といふ説明に就ては敬服せざる可く餘儀なくされた。そうして二十名の聖務を掌る歌隊修女と四十名の勞働修女との日常生活を聴かされた、合計六十名より成る一家族が即ち天使園の執行機關なのである、そうして此の六十名の修道者は、清貧、貞潔、從順の三誓願を立て啞の様に沈黙な生活をするのである、つまり「最もよき談話も多くあつてはならぬ」といふ聖規に基くのである、そうして午前二時に起床して、ろれろ、勞務に就くのである、然し一日八時間が限度となつてゐる。

尤も製産能率を高めやうなごといふ卑しい意味の勞働でなく、神に盡す爲めの筋肉の犠牲に過ぎないのだから——否な神に近づくと手段としての修養がらなのだ、こうした日課は可成馴れない者にとつては苦痛らしい、然し強い信仰は肉體に感ずる総ての苦痛を堪へ忍ばするものであるらしい、志願者は天主教會信者に限られて居る、そうして年齢は自十七歳至二十六歳とされて居る、爺さんの話によると昨大正十二年には四名の新入道者があつたと。

湯川温泉から

市内電車大門から東に向つて三十分りの終点が即ち湯川温泉場である、明治十九年越前の人石川某の發見する處のもので、爾來各所に競つて人工掘鑿を施し、目下では三十餘軒浴場を經營して居る、南は海、北東は丘陵、陽が沈むと周圍一圓月見草が咲く、俗化して居る様でもこの平和な風物を供へて居る温泉場は少くない、温泉は塩分が含まれて居るが透明で湯量は測り難い程に豊富である、市民にとつては確に天惠の地である。

昔を今に語る温泉夜話——そこには戀に泣く三人情死の涙な、て聽かれぬ哀話もある、亦美人局のやうな凄い一幕物も演出された、或は大森邊の砂風呂で聞く様な乱暴極まる金の取り方もしたらしい、もうして一時は好奇を唆りながらも旅から旅へと香ばしからぬ悪評が傳はつた、斯くて素通りの出來ない此温泉は、新函館名物の數から失はるゝやうな危険の運命を招いた、天は時ならぬ不景氣を齎らして黄金の夢を醒ました、そうして従來の營業方針に改善を餘儀なくさせた、爾來旅の者を主客とする様になつて再び湯川温泉は甦つた。

湯川温泉は夏の浴場ではない、どうしても冬の温泉場である、さりながら夏と雖も波の音を枕にし、蚊帳越に吹き入る風を湯上りの軀に浴びて居る時はた茲處から眺望する函館の夜景——それらは総て結構づくめの避暑地である、が塩分を含む湯は夏の入浴には適しない、どうしても塩分を離れた清々しさが夏に求めらるゝ肌觸りである、この意味に於て私は湯川温泉を冬期に在つて推賞する、人は言ふ冬は海荒れ潮風狂ふと、然しるれば北國何れの

地に在つてもそうなのである、獨り湯川のみ自然から憎まれて居るのではないなる程二重硝子の内から觀る荒涼な風物には、夏に見るやうな平和は無いであらふが、避寒として市民は茲處より外に求むる地がない筈である、そこに天惠の眞の有難さが受得さるゝのである、私は硬はらない、夏も好し、冬にも善し、更に避寒地として冬期に此の温泉の存在することを衷心から新函館名物として頂戴する。

地方趣味としての上戸黨

酒を歌つた馬琴の句に「酒一斗しばし壺中の月見哉」といふ名句がある、更に——醉ふてくだまけや尙ほ可愛いなんぞといふのもあるが是は聊か甘いもので、眞に上戸黨の内面を描寫したものは「た酒飲む人花なら蕾、今日もさけさけ明日もさけ」といふ都々逸それであらふ、更に「——角の酒屋に借がある」てふ左側通行宣傳の安來節に至つては上戸黨の心情、穿つて餘りあるものと言はざるを得ない、凡そ何人と云はず人には趣味のあるもので趣味

に生きてこゝろ人文の實が擧るのである、即ち國民性を語る民族的地方趣味を
れなのである。

趣味の上に現はるゝ嗜好は寒國と暖國とその欲する處は異なるにしても國
民性としての概活的趣味は共通なのである、基督は葡萄の液は飲まずと云ふ
てゐるが、酒を飲んで悪いとは教へてないやうであつた。

さあれ世界は知らず、日本では統計の上から高知縣が上戸黨の首席を占め
てゐる、悪く云ひば酒呑童子が多く、善意に評すれば趣味に活きる文化人が
多いのである、芝居に出る酒豪は後藤か三郎兵衛か安兵衛のやうな英雄ば
かりで頗る男性的な武張つたものゝ様に想はるゝが、優美なものもある、女
鳴神、道成寺、荻萱等の仕出に現れる、聞いたか坊主だちの取扱ふ酒は決し
て男性的なものではない、爰に於て酒は男でありまた女である、以つて吉慶
哀悼兩様に在つて古來から用ひられてゐるのであつた、かくて識者は百樂の
長、飲むべし呑まるべからずと教へてゐる。

◇

酒を迎合することに於て函館は決して遅れを取るものではない、たゞ個人

として個々の酒に對する鑑賞はあるが市民といふ團體の嗜好から見て民族趣
味を代表したもの、即ち酒であるといふことが言ひ得るのである、觀よ酒に
關する廣告の多いこと、文字はそれを能く語つてゐるのである。

電車の中で見る銀釜泉正宗——それは最近最も光つた醇酒の廣告であるの
だ、此の酒は可成古い歴史を持つた所謂灘の生一本といふ名酒であつたと記
憶してゐる、特長は巨額を投じた二十有餘貫の純銀の釜で燗火する酒である
といふことを覺いてゐる。

淺草の今半が震災前まで純金の鍋で牛のすき焼を食はせたそれと共に印象
は記憶に残つてゐる、能く上戸黨の粹人が云ふ、酒の品質は、すき焼か蕎麥
を肴にして淺酌する時に知ることができるといふて居る、もしそれが正鵠を
得た試飲法とすれば函館は下戸黨にも出来る解けであらう、何んとなれば市内
にそばの多いことと屠畜數の著大なことは、成牛一千二十八頭、犢二百四
十四頭、馬二百七十八頭、豚一千八百三十七頭といふ統計を十二年度に示し
てゐるではないか、開港場であるから輸出さるゝものがあるにしても市民は
比較的肉食主義者であることは争はれない、かうした嗜好者の口に愛飲され

年々擴大する傾向から見て銀釜泉正宗は品質に於て優秀であるといふことを能辨に語るものであると評さなければならぬのである、寒國ほど酒に對する鑑賞は進んでゐる、従つて販路は北へ北へと展開するのである、爰に於て良酒は北に對する宣傳を怠つてはならない、そうして名聲を揚げるも下げるも代理店の舉錯如何に存するのであることを記憶しなければならぬのである。

副業としての養豚業

農家の副業としての養鶏は一般的の傾向を示して來て居るが、養豚に至つては未だ幼稚なものと謂はねばならない、函館の養豚事業を今統計から觀ると、十二年度末に於て飼養戸數二十二、頭數七百頭に過ぎない、然しそれは個人としての、部分的な計算は洩れて居るやうに思はれる、新川乃至郊外で二、三頭と飼養して居る即ち趣味と副業的の養豚家を合すれば二十二戸位のものではなく、可成普及的に發達して居るやうに考へられる。

現に昨年度の屠殺數壹千八百三十七頭といふ數字の中には輸入豚も加はつては居るであらふが、養豚數に對し約く三倍といふ比例を示して居る事實から推して現在の養豚は尠なからざる數と想はるるのである。

函館地方に於ての養豚は決して内地のそれに比して困難な状態ではない、なんとかなれば飼料が頗る富饒であるといふ一事それである従つて低廉に手へ這入る關係上丁抹の養鶏に等しい國産的成績を擧げることが容易なのである、函館は澱粉工場を有すること大小二十有餘といふ現状から茲處に生ずる澱粉粕は多大に産するのである、即ちこの粕こそ養豚家にとつて最も歡迎さるゝ飼料りれなのである、加ふるに廢物化した玉蜀黍の存在するといふことも亦養豚家を育つる上に在つて奈何ばかり貢獻するが計り知れないのである、斯くて好飼料の齎らす豚質は、發育に於ても、品質にあつても決して地方豚に劣らない寧ろ優良な結果を示して居る。

豚といふ動物は甚だ不潔なやうに考へて居るが、それは誤斷であつて頗る

清潔好な動物なのである、ただ飼養設備如何が外觀に現はるゝ醜美に過ぎないものである。

さあれ函館に於て否な北海全道に互つて特に誇稱に價すべき特産品として北海ハムの存在は、將來の養豚事業に少なからぬ刺戟を與ふることと信ずるのである。

元來ハムの需要は罐詰類のそのやうに日常の食膳に供へるほごに日本の文化生活は進んでゐなかつた、が現今では罐詰が一般家庭の食膳に上ると同時にハムの愛用は著しくなつた、従つて文化的贈答品として珍重さるゝに到つた、茲に於て函館特産品のハムは函館の新名物として從來の「名物に美味いものなし」といふ恨みを醫するに及んだのである、今や新川橋際に工場を有する北海ハム工業所主の前田さんは、將來は世界的のものにしたいと力んでゐるのも函館の新人として心強い感を與へる。

水産物と加工の發達

西に儀助煮あり、東に巴味付いかりと云ひば、先年議會で問題となつた永井さんの名台詞？と語呂の似通ふ點があるかは知らぬが、從來水産物の加工製品として北海道は今日まで、何等是が代表として見るべき何物をも賣擴めてゐない、強いて求むれば僅に細工昆布の類に過ぎないのである、其他數種類あるも問題ではない、茲に於てか全國的否な世界的海産物の大隻散市である立場から市當局は常に此點に着目し、斯界の發達を策する手段として函館特産品展覽會なる催物を前後既に六回に互つて開催し、直接間接これが啓發に努めてゐるのであつた。

地方特産品として先づ函館は鰯を推さなければなるまい、十二年度の乾鰯貿易高に照すか壹百貳拾四萬九千八百七拾六圓といふ額を示してゐる、實に普通貿易統計表中の首位を占めてゐるのが即ち鰯である、元來北海道地方の

水産品は遺憾ながら今日迄は材料品として内外に輸出せられて、未だ完全な加工製品となつて直接需要者に供給されてゐなかつた、従つて收穫に豊凶の自然的制裁を享くる斯業者は深刻なる盛衰の浮沈を味はねばならないのが現状なのである、茲に於てか、當業者は如何にして水産諸品の價値を嵩め次いで榮枯の影響をして尠なからしめやうかと研究されつゝあるのであつた、例へば鯨の如きも身欠、燻製以外更に文化食料として特種の製法なきかと求むるその如く、鰻に對しても研究されたのである。

即ち巴水産加工所製品巴味付いかの出現それである。

今之を試食するに誰か従來の鰻に比し一進歩を加へたる優雅の存在する風味を直覺することであらう實にその味に於て、體裁に在つて、確に文化食料の境に達したことの誇を示す函館特産品の名聲を辱しめないものである。

今巴水産加工所に就て調ふるに全品今年度の製産額は十五萬袋に過ぎないが近く三十萬袋製産の設備擴張中であるといふてゐる、尙ほ全工場から製出せらるゝ刻鰻は従來一ヶ年十萬貫、巴の雪と稱する干鰻加工品は五萬貫、鯨燻

製二十萬尾といふに到つては、新函館たるもの特産品の豊富を誇らざるべからざるを得ないのである。

鮫川から東京の娘へ

松代——

此の頃の暑熱では、朝組の時はさほどでもあるまいが、晝組の一週間は可弱いお前の軀にとつては辛楚なことであらふね、父さん達の頃には二部制度の教育などいふものは無かつたが、時代が進歩して——頽然の世に産れた爲めに文化に逆向する不幸を味ふのだ。

父さんは毎日、東京の新聞を讀んでは、お前の學校通ひのことを氣に病んでゐる、夜になつても八十八度を降下しないといふ蒸暑さには、あのバラツクの小さな家では助かるまいとすればかり案じて居るのだ。

そんな暑い中でも、一杯の氷水をご褒美に毎日のやうに、ハナ、ハト、マメと教科書の一冊を復習してゐることだらふね、春の凌ぎ好い頃ですら「螢

が飛んでゐます」の頁まで來ると、油の様な汗をかいてゐた前だから、この頃では、油汗を通り越してもうアセボで苦痛は更に増してゐることゝ想うと、暑いながらも凌ぎ好い函館へ早く呼び寄せたいと念じられるのである。

◇

父さんはもう、神さんから申渡された約束のお仕事は完成したのである。今日といふ今日こそは、重みのある総ての荷物を軀から下ろした様な清々しい、産れたばかりの赤ん坊を見るやうな心安さに歸つたのである。そうして今日までこの温泉場の離座敷で殆んど徹夜せん許りに働いた軀の疲労を感じるのであつた、が朝夕は初秋の様な寧ろ寒い程に冷涼を覺ゆるので疲労は何等健康に災してゐない、反つて東京の暑熱に惱まされてゐる前よりは疲労してゐても苦痛の程度は少ないことゝ想ふ。

湯から上つて、西向の窓を開けてゐると、海峡から流れ込む風は、冷や冷やと溢るゝやうに這入つて來る、亦窓の側には、西伯利邊で見る様なポブラが音楽を練習してゐるやうに音律を弾てゐる。

海は砂丘に遮られて眺められないが、濤の響は手にとる様に聞える、函館

山といふ牛モーモーの寝そべつてゐる姿に似た山の嶺は薄い靄に包まれて見える、こうした海と山の情景を居ながらにして翫賞できるといふ結構な温泉場である、函館名所となるのも當然である。ふと私はた前の造つた童を思ひ出した。

ろうして鳥の渡るのに氣づいた。

からすがめづらしくとんできた。

でんしんばしらでないでゐる。

とうさんかしら、かあさんかしら。

鳥はカア／＼と啼いて行つた。

太陽が沈むと温泉場の周圍には、た前の姿を見るやうな月見草が緩ら緩らと頭を動かして咲き出す、葦切雀も鳩も啼く、お前が居たらごんなに嬉ぶことであらふ——と想到すると矢も楯もたまらない程にお前を呼び寄せたくなるのだ。

湯川、根崎、鮫川と續いて居る一帯の温泉地だが湯川、根崎といふ處は、お金を湯水の様子に考へて居る人々の遊場であるが、鮫川は眞實に天恵の有難さを感じるといふプロ階級の人々の爲めに存在して居る温泉場であるのだ。カルシウムを含んだ鹽湯で頗る透明である、温泉の量は實に豊富なものである、りうして森ヶ崎邊のそれと違つて、ひとりでに攝氏三十八度といふ玉子の茹る位な熱度で地の底から噴出してゐるのである、お前はまたこうした温泉を見たことはあるまい、否な不遇に在る父さんは見せたことがないから知る筈がない。

鮫川温泉場といふ旅館は殆んど一軒家といふてもよい位、かけ離れた處に建つてゐる、従つて俗塵をさけて居ることは勿論である、そうして俗人の痴態もなく、脂粉の誘惑もないといふ家族連の入湯場であるのだ、茲家の主人も父さんのお前に於けるやうに一人の娘よりない家庭だ、強い信仰を有つた人だけに俗人と共に金儲けをすることを厭ふて居る、従つて集る人々の多くは湯治を目的とする自炊者が多いのである、従つて自炊してゐる人々の中に

も種々な面白い生活史上の人がある、一人息子を少尉に仕上げて死なれたといふ媼さんは手も足も不自由になつてゐながら、器用に琴、三味線を扱つて三年越この温泉場で琴の師範をして食つてゐるといふ七十幾歳かのお師匠さんもゐる、毎日午前九時になるとお前位の娘が二人來て松づくしや、よいやまを習つて行く、山田流のお琴だからお前にもた稽古させたいと何時もそう想つてゐる。

温泉組合の規定からいふと貸間は一日六十錢で、月極めの下宿は四十何圓だ、父さんは今月の月極め下宿であるのだ、然しどうも下宿は家庭の情味に欠けてゐるので殺風景だ、多少は五月蠅いが、毎日父さん自身、函館からの歸りに、死んだ田尻博士のやうにお菜をぶら下げて來ても好いから、お前を中心に母さんと一緒に嗜好に合う物を喰べてゐる方が活甲斐のある様な感じがされる。

海が荒れないと、毎日の様に、あのお前の好物な烏賊が澤山に漁れる、亦テツクイと呼ぶ蝶も生きたのが極く安價に買はれる、東京では生きた魚と言

ひば、父さんの釣つて来た物より喰べられないが、函館へ来ると総ての魚は生きたものでなければ食はないやうにしてゐる、亦畑のものでも——あの馬鈴薯なんか、それはく／＼安いものだ、こうしてお前の好物の総ては安價なのだ、父さんは眼に觸れるもの、脳に感ずるもの——それらの総てから受ける觸官の刺戟からでもお前を呼んであの震災から享けた精神上の慰安を與えさせたいと希はれるのである、即ち之が迷ひの一つの煩惱といふものなのであらふ、昔奎蓮尊者のお母さんの地獄に陥つた罪もこの煩惱なのである、そうしてお母さんを救ふ爲めに盂蘭盆といふ魂まつりが起つたのであると坊さんはいふではないか、然し父さんは、一人娘のお前の爲めなら地獄に墜ちても厭はない、それ程にわ前が可愛いのである。

◇
どうかお前を住心地の好い函館へ呼んで暑中休暇中だけでも北海道の大氣を吸はせたいものと、その手配に腐心してゐるのである。



ONODA PORTLAND CEMENT CO., LTD.
ONODA PORTLAND CEMENT CO., LTD.

本社
東京市京橋區新富町

工場
青森縣三戸郡湊

日出セメント北海道代理店

海運業



本家商會

函館市末廣町八十一番地
電話 二四三四番

電気工事一般

瀬川商會

函館市東雲町二七九

電話 一八三一番

振替口座小樽 四〇五〇番

電気関係の事は總て

弊商會を御利用下さい

ラヂオの世界が來ました

御相談下さい

本店 函館市會所町六十五番地
電話 一九二七番

早瀨株式會社

支店 東京市麴町區永樂町一丁目
丸ノ内ビルディング八〇七區
電話牛込 六〇〇二番

運漕部 東京市芝區日之出町七
電話高輪 四〇九五番

製材部 東京市芝區月見町二丁目月見橋際
電話高輪 一一九三番

製材部

諸建築材料、家具材、鐵道枕木
路面鋪裝用木塊、セメント樽材
下駄材、電柱用腕木材
其他木工品製造販賣

運送部

船舶代理、解運漕、貨物保管及
荷捌並ニ配達

營業部

土木建築請負、諸官署納入品取扱

營業科目

石 炭
コークス
銑 鐵

函館市東雲町二百四十八番地

濱田商店

電話 二八七五番
二八五五番

海上保險ト火災保險

東洋海上保險株式會社

日本火災保險株式會社

大北火災保險株式會社

ライニックス保險會社

ノーザン保險會社

ガーディアン保險會社

函館代理店

函館市仲濱町十五番地

佐々木汽船株式會社
保險部

電話 四二六七八番

四二六七八番

船 舶

石炭採掘

並ニ販賣

山下汽船鑛業株式會社

函館出張所

函館市仲濱町二十番地

電話 四二九番

營業科目

各種石炭
硫黃滿俺
石灰石雜礦石

函館市青柳町三十四番地

函館鑛業株式會社

電話一二六二番

函館市辨天町

繩蒔問屋



桂久藏商店

電話五五〇番

賣場 函館市船場町

電話一一二〇番

相互金融株式會社 北海道支社

函館市曙町八番地
電話 一一五八番

- 一、當會社ハ中産階級以下ノ金融機關ニシテ三ヶ年満期九ヶ月拂込済
ミノモノニ契約金半額ヲ極メテ低利ニ融通スルノデアリマス
- 一、當支社昨年十一月ヨリ七月迄ノ契約高ハ既ニ七拾萬圓ヲ突破シマ
シタ七月ハ丁度九ヶ月目デ第一回ソ貸出貳萬圓以上ヲ實行致マシ
タ御希望ノ方ハドシ〜御利用ヲ願ヒマス

函館著名營業案内一覽

米麥、雜穀、澱粉

營業種目 區別 營業所町名 氏名 電話番號

米、麥粉、海產物、諸雜詰、砂糖、食料品、石炭、硫黃、セメント、諸機械、船舶代理業

委託 船場町 三井物産株式會社 函館出張所 一四一九

雜穀、澱粉 全 仲濱町 森 卯兵衛 二六

麥粉、砂糖 問屋 西濱町 久保彦助 三六

麥粉、砂糖 全 末廣町 渡邊合名會社支店 三星屋 二一

米、雜穀、海產物、雜貨 全 西濱町 小川合名會社 一九五

雜穀、海產物 全 豐川町 株式會社 加賀商店 八七八

米 全 西濱町 新潤 二郎 三〇二

麥粉、和洋酒、砂糖、諸油 全 辨天町 和田治五郎 八四二

米、海產物 全 西濱町 橋谷甚右衛門 一二一

米、麵類、麥粉、諸油、酒類、砂糖 全 辨天町 橋谷己三吉 二一四

米、酒類、砂糖、果實、蔬菜 問屋 小賣 末廣町 坂本兼吉 五一八

米、金融 問屋 天神町 今井定太郎 一六四

雜穀、海產物 全 豐川町 小林錄太郎 九八三

米、雜穀、海產物 全 西濱町 太刀川善吉 三四〇

米、麥、雜穀、蒲團、製綿、船舶代理業 全 東濱町 株式會社宮本商店 一二〇六

雜穀、馬糧、麥粉、麵類、和洋酒、諸油 全 東濱町 伊豫田德次郎 一二八

米、雜穀、海產物	全	船場町	柳澤善之助	二二三
米、海產物	全	仲濱町	川端石太郎	五二二
米、醬油、味噌、食鹽	全	西濱町	相馬健一郎	八四〇
米	卸小賣	榮町	函館米商合資會社	四二六
全	全	鶴岡町	西郡秀左衛門	九六一
雜穀、澱粉、海產物	問屋	船場町	滿留三商店	一五八六
雜穀、海產物	全	豐川町	渡邊富吉	一〇六八
全	全	船場町	山路富次郎	一一三七
米、海產物、金融	問屋	西濱町	高橋善平	二七
雜穀、海產物	全	豐川町	川合堅次	七九六
全、金融	全	辨天町	平野與次衛門	一三五〇
米、雜穀、金融	卸小賣	松風町	南場吉次郎	六五一
雜穀、澱粉、海產物	問屋	豐川町	毛利甚兵衛	五四四
米	全	西濱町	西原林次郎	六〇六
米、雜穀、澱粉、海產物	全	豐川町	藤堂利吉	三八〇

雜穀、澱粉、海產物	全	船場町	上野久吉	八一六
米穀、澱粉、海產物	全	豐川町	小幡熊次郎	一三三七
米、雜穀、麥粉、砂糖	全	末廣町	目貫商事株式會社	四三八
和洋酒、雜貨、鐵山	全	仲濱町	和田芳治郎	九〇七
米、雜穀、海產物	全	船場町	川名利吉	四一九
雜穀、米糠、海產物	全	辨天町	高橋清治	五
麥粉、麵類、白玉	全	東濱町	大谷三太郎	一九一七
雜穀、海產物	全	幸町	三輪竹二郎	三七〇
雜穀、海產物、石油	全	豐川町	橋本金太郎	六六六
雜穀、海產物	卸小賣	地藏町	伊勢田商店	一五六
米、雜穀	全	問屋	西濱町	一九〇
精麥、雜穀、海產肥料	全	問屋	新與三郎	六五六
和洋酒、砂糖、雜貨	全	問屋	松田千太郎	六五六
米、雜穀、海產物	全	問屋	松田千太郎	六五六

雜穀、海產物	全	東濱町	大森	德次郎	一二〇七
麥粉、砂糖、菓子種	全	地藏町	合資會社	伊藤商店	四六一
菓子道具	全	豐川町	松田	季藏	二二二
米、雜穀、海產物	全	船場町	川名	得太郎	五四〇
雜穀、米糠、海產物	全	全	藤村	康	一六二一
雜穀、澱粉	全	全	田中	友次郎	四一八
米、麥、味噌、醬油	卸小賣	辨天町	橋本	新太郎	二七五
雜穀、海產物	全	東濱町	橋本	正二郎	一三七〇
精米	全	富岡町	三浦	商	七一六
雜穀、澱粉、海產物	全	船場町	森本	商	一〇三六
雜穀、海產物、肥料	全	船場町	成宮	商	二八九七
米、雜穀、澱粉、肥料、海產物		豐川町	大越	久太郎	三四二
雜穀、肥料、海產物		末廣町	岡本	忠藏	四二一
雜穀、澱粉、肥料、海產物		船場町	若松	嘉一郎	一〇〇八

米、食塩、味噌、醬油、紙		東雲町	辻	市太郎	七三九
文具、火災保險代理店		船場町	佐藤	善次郎	七〇三
雜穀、澱粉、肥料、海產物		仲濱町	當摩	彦太郎	五三四
米、雜穀、海產物、味噌、醬油		仲濱町	本庄	丑吉	四六二
雜穀、海產物、肥料		船場町	布目	忠	二一三九
麥粉、砂糖、菓子	卸問屋	船藏町	小西	商	三九六
米、肥料、海產物、雜貨	問屋	若松町	工藤	商	五九九
米、雜穀、麥粉、麵類	全	東濱町	本問	久平	二〇七八
和洋酒、味噌、醬油、罐詰	全	仲濱町	西口	宗一	五〇八
米、雜穀、海產、肥料、薪材	問屋	仲濱町	西口	宗一	五〇八
木炭	問屋	仲濱町	岩出	支店	三六〇
雜穀、肥料、魚油	全	仲濱町	横山	喜一郎	一七二
米、雜穀、澱粉	全	東濱町	石塚	彌太郎	三二三
米、雜穀、肥料、海產物	全	豐川町	太田	半三郎	一四一三
雜穀、澱粉	全	豐川町	太田	半三郎	一四一三

米、雜穀、海產物	全	仲濱町	安井	理平	三九五
麵類、白玉、和洋酒、罐詰	全	鶴岡町	東出	合名會社	三一六
食料品、石油	全	松風町	大嶋	德松	二八七三
米、金融	全	東濱町	照井	又八	一六三三
雜穀、鹽干魚、鯨肉、海草	卸小賣	東濱町	照井	又八	一六三三
米、精麥、馬糧	全	東川町	山田	房吉	九五
米、雜貨	問屋	富岡町	小柳	次郎	吉
雜穀、海產物、肥料	全	東濱町	武內	時三	吉
米、雜穀	全	蓬萊町	正田	勘三	郎
雜穀、海產物、海草	全	船場町	小林	忠治	郎
麥粉、砂糖、醬油	全	末廣町	小島	又次	郎
米、荒物、雜貨	問屋	船場町	尾形	商	店
雜穀、和洋酒、罐詰、砂糖	全	地藏町	佐藤	嘉八	一〇四七
米、雜穀、海產物	全	仲濱町	高島	佐吉	九六五
雜穀、澱粉、肥料、海產物	全	豐川町	仲濱	伊三	郎

一四〇

米、馬糧	全	寶町	長谷	川吉	藏	三八六
米、吳服、製材	卸	東川町	渡邊	增太	郎	九五五
雜穀、海產物	問屋	東濱町	杉村	福松	郎	六一六
雜穀、澱粉、海產物、肥料	全	豐川町	川端	德松	郎	一一八八
雜穀、海產物、肥料	全	豐川町	小杉	清市	郎	四一一
雜穀、澱粉、海產物	全	東濱町	相川	四郎	郎	八三二
澱粉、蕎麥粉、麵類、砂糖	全	海岸町	船山	清藏	郎	五三七
酒、罐詰、味噌、醬油	全	東濱町	奧村	健三	郎	二八七〇
雜穀、鹽干魚、肥料、筋子	全	東濱町	奧村	健三	郎	二八七〇
米、雜穀	全	地藏町	石川	安藏	郎	一六五九
雜穀、肥料、海產物	全	豐川町	阿部	寅四	郎	九二五
雜穀、海產物	全	東濱町	小林	新太郎	郎	一一二六
米、醬油	全	鮎澗町	清水	新兵衛	郎	一一七〇
雜穀、海產物、魚油	全	東濱町	前田	嘉左衛門	郎	二一一
米、麥、雜穀	全	仲濱町	大正商會	田畑由太郎	郎	二〇六

一四一

雜穀、澱粉、塩干魚、肥料	全	豐川町	內山	彌作	三九九
米、麥	全	船場町	深谷	仁三	一五四七
雜穀、乾物	卸小賣	末廣町	宮崎	榮助	七一四
雜穀、澱粉、肥料、海草、鹽干魚	小賣	豐川町	熊倉	保次	二〇七〇
米、和洋酒、雜貨	卸小賣	東川町	柏	留吉	一五二五
米、薪炭	卸小賣	相生町	井上	利三	一二〇四
米、麥、雜穀、海產物、味噌	全	汐止町	野村	喜一	商店 一四二〇
醬油、石油	小賣	富岡町	廣谷	豐三	四八
米、雜穀、精穀	問屋	辨天町	林	與三	次郎 一八九
米、雜穀	全	西川町	山口	樂平	六九九
麵類、和洋酒、罐詰、砂糖	全	鶴岡町	夏原	喜代	松 二一八七
味噌、醬油	卸	東濱町	上山	與兵衛	一七二六
米、海產物、雜貨	小賣	松風町	大島	留吉	二六五一
米、金融	卸小賣	松風町	三	船林	藏 一四七〇
米、雜穀					

雜穀	問屋	船場町	梶川	清吉	二四六三
雜穀、海產物	卸	會所町	北海	商行	一九二七
米、海產物	問屋	幸町	森榮	作	一一三八
雜穀、澱粉、片粟粉	全	東川町	小林	喜久治	八四三
雜穀、澱粉、海產物	全	東濱町	菅谷	常吉	一五四五
雜穀、澱粉	全	東濱町	喜多村	吉二	九一八
雜穀、海產物、鯉節	全	豐川町	早崎	政康	一九〇八

砂 糖、機械建築材	卸	仲濱町	鈴木商店	函館支店	二六七〇
保險代理業、漁業鹽	卸小賣	末廣町	渡邊台名社支店	金森	一〇八三
洋酒、食料品	問屋	西濱町	酒谷	商店	二四七
和洋酒、海產物、荒物雜貨	仲濱町	合名會社	函館鹽賣所		一三四九
普通鹽元賣捌					

砂糖、和洋酒、食料品

罐詰、海產物	全	西濱町	西出商事株式會社	五六
酒、酒精、味噌、醬油	製造卸	高砂町	丸善菅谷合名會社	四六五
和洋酒、醬油、清涼飲料	問屋	辨天町	千代盛商會	九五七
罐詰製造	全	大繩町	山天渡邊合名會社	一七三〇
和洋酒、罐詰、食料品	全	末廣町	林合名會社	一〇六
清涼飲料、保險代理業	全	末廣町	梅津	福二 三二七
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	全	末廣町	河合	清太郎 二八
食料品、雜貨	全	地藏町	齋藤	松太郎 一〇一
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	全	大町	大庭	彦平 三〇九
酒、砂糖、罐詰、醬油、金融	全	東雲町	小森	良三郎 二四三
和洋酒、砂糖、味噌、醬油	全	旭町	小山	富藏 一九一
海產物、雜貨、石油	全	西川町	茅野	勇吉 八一九
酒類、釀造	卸小賣	東雲町	小森	良三郎 二四三
全金融	問屋	旭町	小山	富藏 一九一
味噌、醬酒釀造	全	西川町	茅野	勇吉 八一九
酒類、罐詰、砂糖、味噌	全	汐止町	前側	末松 一二四一
醬油、荒物、雜貨、石油	全	全	全	全

酒類、石油、荒物、雜貨	全	地藏町	塗師	松之助 六六二
和洋酒、罐詰、味噌、醬油、酢	全	地藏町	奧田	市三 一四八五
醬油釀造	全	海岸町	中村	合名會社 一〇六六
味噌製造、羹工品	全	東濱町	淺岡	梅吉 三一
味噌、醬油製造	全	旭町	旭	醬油合資會社 四二
醬油釀造	全	東川町	笠川	治助 三六五
和洋酒、罐詰、食料品、荒物	卸問屋	若松町	森田	國藏 四三二
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	卸小賣	末廣町	塚越	市太郎 八三九
食料品、海產物	全	寶町	國松	源右衛門 六
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	全	寶町	國松	源右衛門 六
酒、鹽、砂糖、味噌、諸油	問屋	西濱町	奧寺	仁三郎 二七一
食料品	卸小賣	末廣町	藤井	清太郎 六一
罐詰、漬物、乾物、果實	全	末廣町	安田	商店 一三六一
蔬菜	全	末廣町	安田	商店 一三六一
清酒、白酒、石油、雜貨	卸	海岸町	中村	諭二郎 九四三

清酒、味噌、醬油、罐詰	卸小賣	榮町	大谷	八藏	二〇〇九
雜貨	仲買	西濱町	石黒	龜太郎	九一五
酒類、雜貨	卸	鶴岡町	鶴澤	兼造	二二九九
味噌、海產物、菓子工品	同	船場町	鎌重	支店	一五三
罐詰、海產加工品	小賣	末廣町	藤井	清五郎	一一八七
酒、味噌、醬油釀造	卸小賣	旭町	宮崎	竹四郎	八〇九
和洋酒、罐詰	卸	大町	酒井	長作	四三一
和洋酒、罐詰、砂糖、味噌	卸小賣	海岸町	福久	市太郎	一七六七
酒類、醬油、石油、砂糖	全	地藏町	中村	平藏	一六九
醬油釀造、味噌、酒類	全	大黒町	成田	六太郎	一六八八
和洋酒、罐詰、乾物	全	若松町	根子	商店	一五〇七
果實、青物	全	海岸町	服部	豊次郎	七五二
酒、味噌、醬油、荒物、雜貨	全	西川町	鈴木	小太郎	一二〇一
和洋酒、かうじ、味噌	全				

漬物、青物	全	海岸町	久末	利吉	一一五一
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	全	地藏町	松田	永治	一〇九八
雜貨	問屋	地藏町	百田	泰造	一三四一
和洋酒、罐詰、果實、蔬菜	問屋	地藏町	百田	泰造	一三四一
甘藷	問屋	地藏町	百田	泰造	一三四一
醬油	卸小賣	大町	細野	商店	五五六
酒類、味噌、醬油、木炭	卸	會所町	土谷	彦藏	三三三
酒類、食料品、漬物、雜貨	卸小賣	大黒町	恒本	與三郎	一二四八
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	小賣	真砂町	赤澤	長兵衛	二〇六六
砂糖、雜貨、荒物	小賣	真砂町	赤澤	長兵衛	二〇六六
食料品(日露貿易)	仲介	仲濱町	檜枝	和七	三九六
酒類、食料、雜貨、海產物	卸小賣	鶴岡町	中野	直三郎	一三九三
和洋酒、罐詰、五稜郭漬	全	地藏町	佐々木	定吉	四九九
燒酎、砂糖、麥粉、和洋菓子	全	東川町	古谷	清次郎	一七五六
酒、罐詰、味噌、醬油、砂糖	全	海岸町	竹林	由次郎	二一四六

和洋酒、食料品、味噌 醬油	全	東濱町	野澤	千代	太郎	一二〇二
酒、罐詰、味噌、醬油	全	大森町	阿部	文之助		一一七一
和洋酒、味噌、醬油	卸小賣	旭町	石橋	彦一郎		八七〇
和洋酒、味噌、醬油	全	若松町	宮石	初太郎		一二三五
和洋酒、味噌、醬油、荒物 雜貨	全	榮町	山本	徳次郎		七八二
和洋酒、罐詰、味噌、醬油 乾物類、鯉節	全	地藏町	小林	茂次郎		三八九
酒、醬油、罐詰、酢	問屋	辨天町	岡田	菊太郎		一五二〇
和洋酒、罐詰、食料品	全	西川町	金谷	清五郎		一九五二
和洋酒、罐詰、雜貨	全	若松町	柴田	養吉		一四七五
酒類、海産加工品、雜貨 荒物	全	相生町	赤坂	源助		二〇六四
味噌、醬油製造、金融	問屋	高砂町	古川	金兵衛		一九八
和洋酒、罐詰、味噌、醬油 荒物、雜貨	卸小賣	大森町	菅原	忠治		一八七六

和洋酒、食料品、罐詰 荒物、雜貨	卸小賣	惠比須町	佐々木	耕作		一二二
酒類、荒物、雜貨	全	春日町	池田	清次郎		一六〇八
和洋酒、荒物、雜貨	小賣	辨天町	本間	四郎治		一〇六二
和洋酒、味噌、醬油、砂糖 罐詰、鯉節、鶏卵	小賣	蓬萊町	北村	爲藏		九八
和洋酒、罐詰、醬油	卸小賣	大黒町	小野	金治		一五九九
萬漬物	卸問屋	辨天町	酒谷	喜三郎		一三六五
酒類、荒物、雜貨	卸小賣	東川町	杉田	杉太郎		三八
船舶食料品賣込 洋品雜貨	全	東濱町	古田	勘吉		一八七二
罐詰、海産加工品	全	末廣町	後山	庄太郎		二三一五
和洋酒、罐詰、味噌、醬油	全	西川町	丸山	溜		二三一四
ハム各種、ソーセージ カルパース	製造 販賣	新川町	北海	ハム工業所		一八二三
味噌、醬油、鶏卵	全	汐止町	境	勘助		八三五

和洋酒、罐詰、肉類、雞卵 全 大町 棚 內 常 吉 一二三六
 食料、雜貨、輸入、機械工具 末廣町 壹 報 商 會 一四九
 電氣品

海產物、海草、肥料

海產物、鑛山、金融 問屋 大町 相馬商店 五四
 人造肥料 全 有川通 大日本人造肥料株式會社 函館工場 一三五
 海產物、倉庫業 全 辨天町 小熊 幸一郎 三四四
 海產物、石炭、雜貨 全 仲濱町 大倉商事株式會社 一五三五
 鮮魚、鹽干魚 全 豐川町 函館魚商株式會社 六一〇
 海產物、藁加工品 全 末廣町 木島 豐治 七一三
 鹽干魚、肥料、海草 全 船場町 寺尾 豐太郎 九〇九
 鹽干魚、肥料、魚油、海草 全 東濱町 田中 幸四郎 二四四
 海產物、肥料、海草 全 船場町 安達 支店 二七七
 海產物、藁加工品 卸小賣 辨天町 桂 久藏 五五〇

一五〇

一五一

鹽干魚、肥料 問屋 船場町 高杉藤三郎 七〇五
 海產物、肥料 全 豐川町 船木 德松 一三八一
 鹽干魚、海草類 全 豐川町 田中 仙吉 一三二六
 海產物、生命、火災 全 大町 栖原商店 二三
 鹽干魚、肥料、海草 全 東濱町 高岡 新助 五四九
 海產物、肥料、魚油 全 東川町 塚田 才次郎 一七四一
 海產物 問屋 東濱町 北出 德太郎 一四九三
 海產物、石油、保險代理業 全 仲濱町 平出 喜三郎 三五六
 鹽干魚、鮮魚 全 豐川町 水口 忠三郎 一六二二
 鹽干魚、鮮魚 全 船場町 堀口 文三吉 一一〇四
 海產物 全 東濱町 小島 久次郎 七二三
 鹽干魚、肥料、鮮魚 全 豐川町 佐藤 重五郎 六七〇
 海產物 全 汐止町 土田 保吉 三七九
 肥料、海草 全 豐川町 保田 七勝 一五九

鹽干魚、肥料、海草	問屋	船場町	岩	崎	常	七	八二九
鹽干魚、海草	全	船場町	壽	商	會	二二六六	
鹽干魚、鮮魚、肥料、海草	全	豐川町	石井	鐵太	郎	九一一	
鹽干魚、鮮魚、肥料、海草	全	豐川町	飯白	商	店	四九五	
鹽干魚、干貝、肥料、昆布	全	仲濱町	八木	財	吉	五九	
海產物、肥料	全	豐川町	八幡	三	次郎	一一〇五	
鹽干魚、海草	全	東濱町	佐野	喜代	八	二八六八	
海產物、金融	全	船場町	近藤	孫三	郎	二四五	
鹽干魚、肥料、昆布	全	豐川町	大橋	織太	郎	六一五	
鹽干魚、肥料、筋子	全	西濱町	小山	與四	郎	六四九	
海產物、肥料	全	豐川町	谷藤	己之	松	一〇五九	
海產物、海運業	全	大黒町	高橋	松太	郎	五七二	
鮮魚	全	各地頭町	上田	武	次	一四六六	
鮮魚	全	東濱町	三熊	長	吉	二一一九	
海產物	全	豐川町	大淵	商	店	一三六〇	

海產物	全	豐川町	德田	安	吉	一一〇六	
海產物	全	西濱町	若松	商	會	八〇四	
鹽干魚、肥料	全	幸町	林正	三	郎	一一六二	
海產物	全	大町	片谷	勇	藏	一〇四五	
海產物	全	豐川町	大庭	庄	松	一五七一	
鹽干魚、昆布	全	豐川町	小長井	重大	郎	三七	
海產物、肥料	全	東濱町	奧田	奧太	郎	七四二	
鹽干魚、肥料、海草	全	豐川町	時田	商	店	二〇六九	
鹽干魚、鮮魚	全	豐川町	新谷	末	吉	一五二六	
海產物	全	幸町	藤谷	儀八	郎	五八二	
海產物	全	旅籠町	山口	喜	平	七〇九	
海產物、肥料、海草	全	船場町	時田	寶次	郎	一五〇二	
海產物	全	東濱町	柴田	家	光	四三七	
鹽干魚、鮮魚	全	豐川町	中西	友	吉	五五四	

鹽干魚、干貝、昆布、荒物 雜貨	全	大町	岡崎	半治	二一三七
海產物	委託	音羽町	函館	魚市場	一八一六
海產物	問屋	汐止町	大場	庄八	一二九〇
鹽干魚、肥料、鯧煮干	全	汐止町	黒丸	商店	一〇一九
鹽干魚、肥料、鮮魚	全	豊川町	高村	善太郎	一六三八
海產物	全	西濱町	町野	末藏	二〇〇六
全	全	汐止町	平田	平八	八八五
鹽干魚、海藻類	全	豊川町	太田	寅吉	二二一一
海產物	全	大町	八木	常藏	一五八三
海產物、肥料、魚油	全	船場町	小林	商店	二五一二
肥料、海藻	製造問屋	豊川町	鈴木	安太郎	三四四
海產物、肥料	問屋	東濱町	花卷	誠太郎	一四六四
海產物、及加工品、粕	委託	鶴岡町	澤田	助三郎	六二一
鹽漬物	全	豊川町	野村	梅太郎	六〇三
海產物、蒲鉾	卸小賣	豊川町	野村	梅太郎	六〇三

一五四

蒲鉾

卸小賣 惠比須町 宮原 德松 一二六五

一五五

飲料水

五稜郭水採取、倉庫業	卸問屋	真砂町	龍紋水室函館支店	二五七
ラムネ、サイダー製造	卸	地藏町	川守田 完三	七八九
製氷	卸小賣	豊川町	北原 鉦太郎	四〇三
清涼飲料製造	卸	鶴岡町	石田 宗兵衛	一三三九
ラムネ、サイダー製造	卸小賣	東川町	廣安 幸太郎	一〇三七
ラムネ、サイダー製造	全	寶町	佐藤 喜一郎	二五八三

菓子、茶

菓子製造	卸	千代ヶ岱	函館菓子製造會社	二二九七
和洋菓子	卸小賣	末廣町	千	五五
菓子製造	問屋	會所町	岡部 榮吉	二七三
和洋菓子製造	全	札幌通	帝國製菓株式會社	一四四一

和洋菓子	小賣	末廣町	風月堂	田村松五郎	一〇
和洋菓子製造	問屋	東川町	加藤	佐市	一七一二
銘茶、陶器、板硝子諸器	卸小賣	地藏町	柳田合資會社		六九六
銘茶、茶器、薰香類	全	末廣町	田中正右衛門		一一三九
銘茶、コーヒ、茶道具、薰香	全	末廣町	小西清風園		四六三
和洋菓子製造	卸	末廣町	小網富太郎		六四四
和洋菓子、菓子原料	卸問屋	惠比須町	高橋庄治郎		一〇八八
和洋菓子	卸小賣	松風町	馬場鉄五郎		二六二九
和洋菓子、食パン	卸問屋	辨天町	第三東洋堂		一六一二
和洋菓子、金融	卸小賣	汐止町	安達吉次郎		七四九
和洋菓子、食パン	全	汐止町	養和軒		一二三二
菓子、菓子原料	卸	蓬萊町	中瀬商		一五七五
和料菓子、餡食パン	卸小賣	相生町	杉村廣太郎		二二九
銘茶、草履、雨傘、乾物	全	末廣町	長橋與三郎		九二四

和洋菓子	小賣	辨天町	柳田	伊太郎	一〇五八
和洋菓子	問屋	辨天町	相澤	兵作	一八五二
銘茶、諸紙、文具	卸	末廣町	高橋	淺次郎	七〇一
水飴製造	全	若松町	砂子	初二郎	二五四三
銘茶、薰香、茶菓、各種紙類	小賣	東雲町	佐藤	相樂園	一四四四
銘茶、和洋紙、文具	全	大黒町	藤川	清次	一〇一五
菓子	卸小賣	東雲町	松本	善吉	二一六五
菓子製造	小賣	惠比須町	高橋	音治	一四〇五
和洋菓子、甘栗	卸小賣	蓬萊町	勝木	政治	二八〇三
菓子種	卸	東川町	岡部	多吉	二九三
菓子	小賣	鶴岡町	鍵谷	幸作	一八五八
菓子種	卸	鶴岡町	五香	商店	一一六八
菓子	小賣	大町	川	德治	一五九五
和洋菓子	全	相生町	間	岩藏	一四四五
和洋菓子	製造卸	東川町	平沼	新七	二五五二

乾物、果實、蔬菜

果實、野菜、乾物	委託	汐止町	函館果實野菜市場	七二九
乾物、果實、青物	委託	地藏町	勝木合名會社	一〇一二
果實、野菜	委託	鶴岡町	澳	五九二
果實、野菜	問屋	末廣町	瀨	七八一
乾物、果實、甘薯	問屋	地藏町	金井喜藏	四九九
乾物、鯉節、馬具、麻裏	卸	地藏町	坂田音藏	二四〇三
果實、蔬菜	問屋	西川町	高田豐太郎	一五二一
果實、蔬菜	卸小賣	惠比須町	黑丸商	七九一
果實、乾物、荒物、雜貨	小賣	大黑町	林忠作	一七二四
果實、蔬菜、木炭	卸小賣	海岸町	木村森之助	五三七
果實、蔬菜、乾物	卸	鶴岡町	岡地太吉	一六八七
果實、乾物、荒物、雜貨	小賣	大黑町	町出治與門	一七二〇

獸肉、煉乳、バター

煉乳、バター	製造卸	東濱町	北海道煉乳株式會社 函館支店	二〇七四
牛羊豚肉、雞卵、諸肉	卸小賣	辨天町	原鎮太郎	七五四
精肉、雞卵、獸肉	全	逢萊町	土橋多次郎	四二二
精肉、雞卵、獸肉	全	松風町	能登川善三郎	一七五七
肉類	全	末廣町	鎌田善三郎	五六五
肉類、雞卵、牛乳、バター	全	西川町	古旗耕	六二
精肉、雞卵	全	東濱町	山邊松次郎	二一八
牛乳、バター	全	湯ノ川通	時任靜二郎	一一六七
雞卵	卸	旅籠町	藤村正次郎	一一八四

紙、文房具

機械漉和紙	製造卸	西濱町	北日本製紙株式會社	二二七九
糊、和洋紙、文房具	卸小賣	末廣町	秦茂三	六五〇

和洋紙、文房具	卸小賣	大町	新	彌	七郎	二二四
書籍、雜誌、文具、紙	全	末廣町	魁	文	社	三四五
帳簿、樂器、運道具	全	末廣町	一	二	堂	七六〇
教科書、圖書、雜誌	全	若松町	大	正	堂	一五〇一
各種運動具	全	末廣町	西堀	久太郎		五四六
書籍、雜誌、文房具、帳簿	全	製造卸	千代ヶ岱	函館製紙合資會社		一六三
書籍、繪葉書、和洋紙	卸	地蔵町	小島	大盛堂		八一〇
文房具	卸	汐止町	石垣	喜三郎		一〇一三
漉返紙	卸	末廣町	江渡	靜光堂		二〇八
邦文タイプライター	卸小賣	末廣町	吉田	隆二郎		一八五
和洋紙、文具	全	鶴岡町	佐野	魁春堂		八六三
和洋紙、文房具、帳簿	全	鶴岡町	伊藤	貞雄		二五七三
和洋紙、教科書、雜誌	全	地蔵町	伊藤	貞雄		二五七三
文房具	全	地蔵町	伊藤	貞雄		二五七三
和洋紙、文房具	全	地蔵町	伊藤	貞雄		二五七三

和洋紙、文房具	小賣	地蔵町	山田	金兵衛		六〇四
和洋紙、文房具	全	鶴岡町	村井	幸作		二九二五
和洋紙	卸小賣	鶴岡町	田中	貞雄		六八五
紙、和洋小間物、化粧品	小賣	蓬萊町	池田	清義		二九五
賣藥、履物	卸小賣	地蔵町	西堀	佐助		一一五五
書籍、雜誌、和洋紙、文房具	卸	若松町	久保	內馬吾		二三四二
和洋樂器、運道具	卸	若松町	久保	內馬吾		二三四二
糊、和洋紙	卸	若松町	久保	內馬吾		二三四二
洋雜貨、化粧品						
洋品雜貨、吳服、太物	卸小賣	末廣町	今井	吳服店	函館支店	一三
洋反物、洋服各種	卸小賣	末廣町	金森	洋物店		一四七
洋品、雜貨	卸小賣	末廣町	金森	洋物店		一四七
化粧品、洋品雜貨、吳服	卸小賣	地蔵町	萩野	清六		三四六
太物、洋反物	卸小賣	地蔵町	萩野	清六		三四六

洋品雜貨、吳服、太物	卸小賣	地藏町	加藤	慶次郎	四九
洋服、電氣器具材料	卸	地藏町	福村商事株式會社	一二八九	
足袋、履物、鼻緒、護謨靴	卸	地藏町	塚本合名會社	六五	
メリヤヤ、足袋、吳服太物	卸	地藏町	塚本合名會社	六五	
洋反物	卸	地藏町	塚本合名會社	六五	
メリヤス、足袋、綿布、太物	卸問屋	地藏町	榮二支店	五七〇	
洋反物、綿糸、製綿	卸	地藏町	十全堂	商店	九三
和洋小間物、化粧品	卸	地藏町	加藤	文五郎	四三六
帽子、袋物、化粧品	卸	末廣町	加藤	文五郎	四三六
洋小間物	卸	末廣町	加藤	文五郎	四三六
洋傘、吳服、綿布、洋反物	卸小賣	松風町	小山	與三郎	二〇九七
和洋小間物	卸	地藏町	西澤	音八	二八二
洋傘、メリヤス、吳服、太物洋織物	卸小賣	東雲町	芦野	歡二郎	一六三九
メリヤス、足袋、洋反物	卸	汐止町	國立	享次郎	二〇六八
和洋雜貨、小間物	卸小賣	地藏町	長田	富藏	八一

和洋小間物	小賣	末廣町	吉田	勘右衛門	二五四八
洋品雜貨、化粧品、履物	小賣	若松町	高橋	喜太藏	九七一
雨傘	小賣	若松町	高橋	喜太藏	九七一
洋品雜貨、化粧品、吳服	小賣	若松町	塚本	富太郎	一〇八七
太物、洋反物	小賣	若松町	塚本	富太郎	一〇八七
和洋小間物	卸小賣	地藏町	兒玉	松之助	二九二
洋品雜貨	卸小賣	惠比須町	竹田	傳之助	三七七
洋品雜貨	小賣	末廣町	新田	完一	二六一
洋品雜貨、化粧品	小賣	末廣町	新田	完一	二六一
洋品雜貨、革靴、護謨靴	全	松風町	白井	洋品店	二二二四
洋品雜貨、メリヤス、帽子	全	鶴岡町	山田	福二郎	二〇九八
洋品雜貨、メリヤス、帽子	全	末廣町	竹田	合名會社	二九九
足袋、仕立物、吳服、太物	卸小賣	西川町	武藤	三之亟	一二三〇
和洋小間物、化粧品、履物	小賣	末廣町	恒川	合名會社	一六〇六
雨傘、寫真機及材料	小賣	末廣町	恒川	合名會社	一六〇六
洋品、雜貨、化粧品、板硝子硝子器	小賣	松風町	川合	惣吉	一七七三